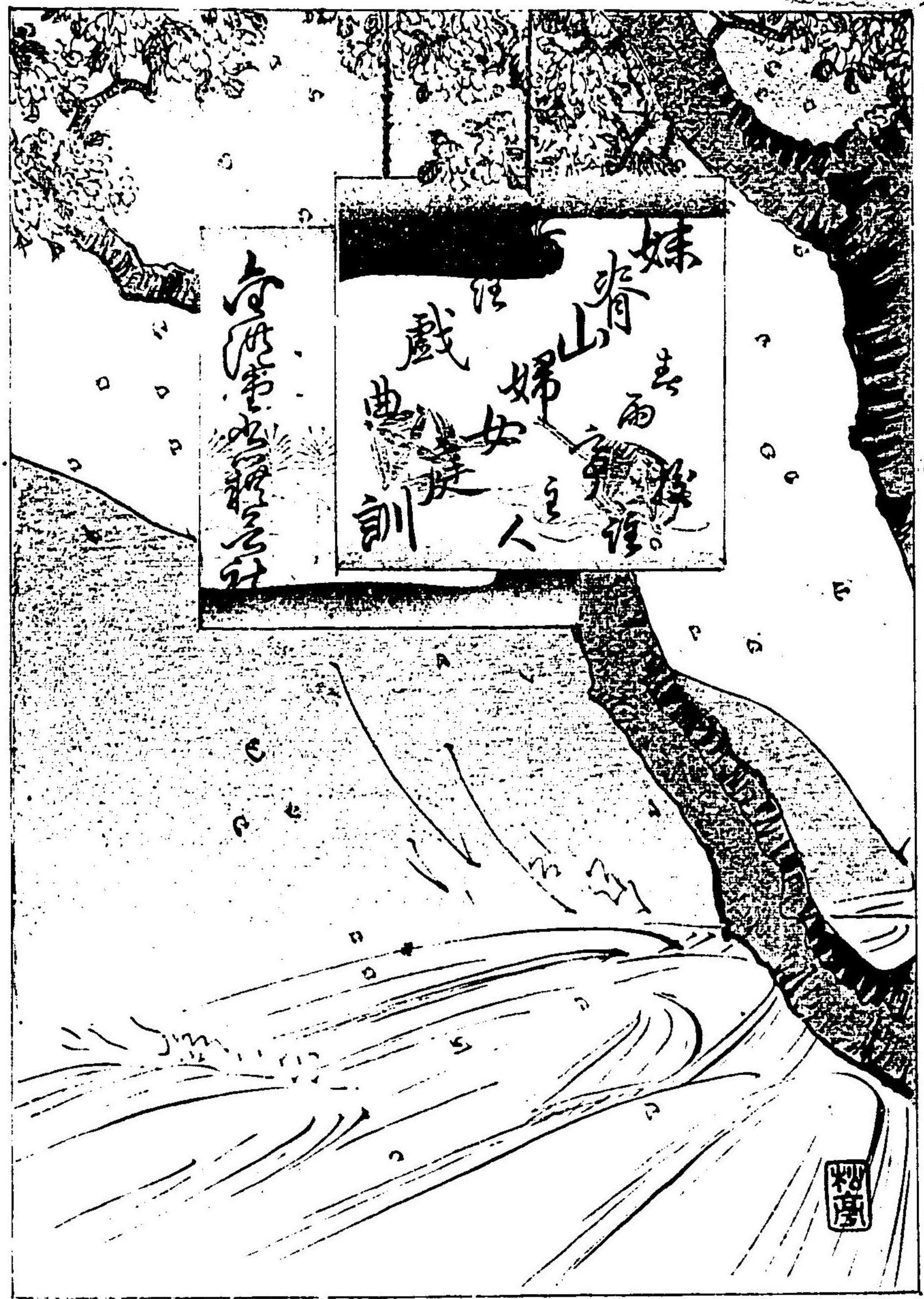


447



088189-000-8

特9-779

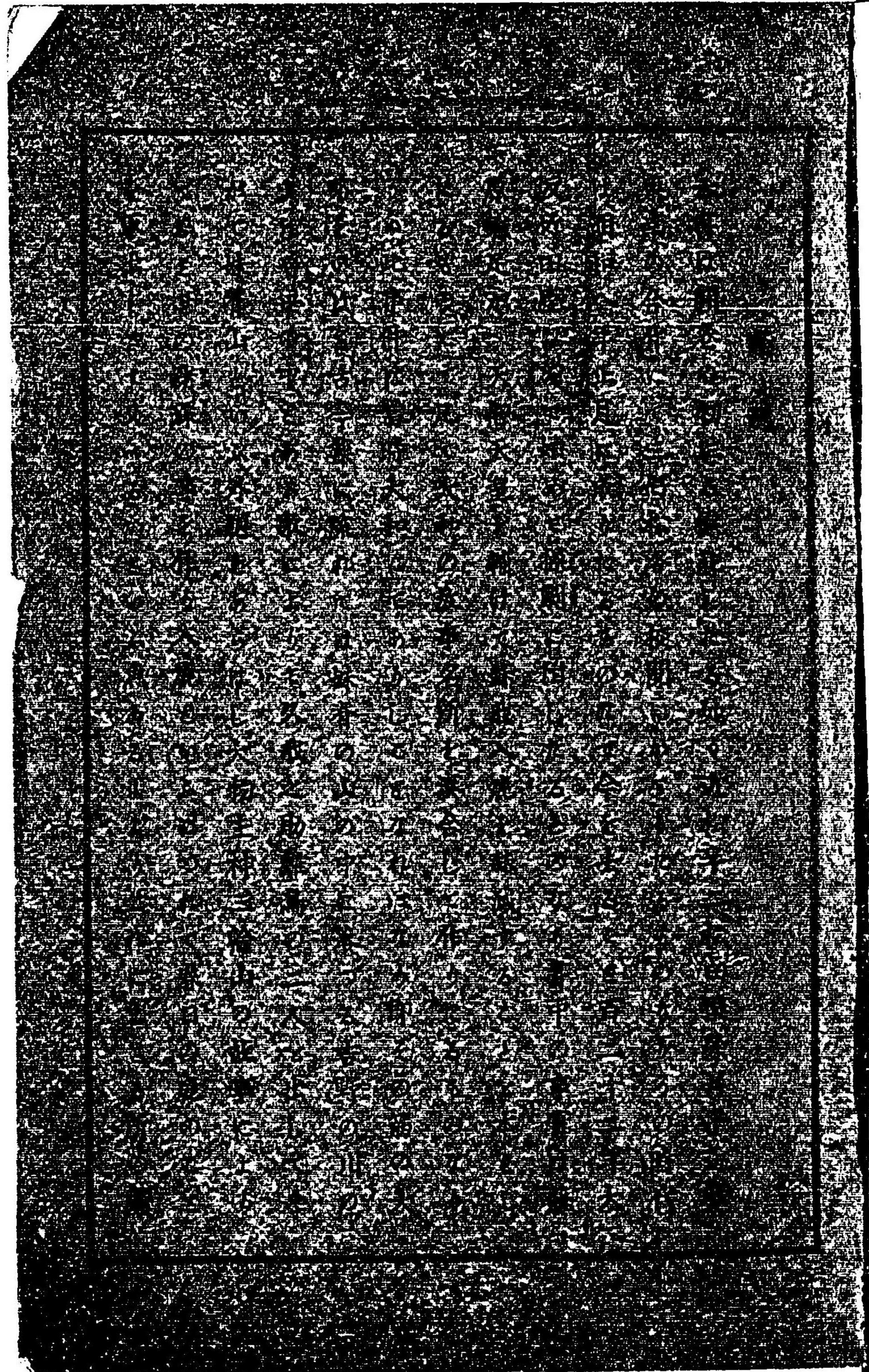
妹背山婦女庭訓

近松 半二/等著

M20

DBI-0012





開題

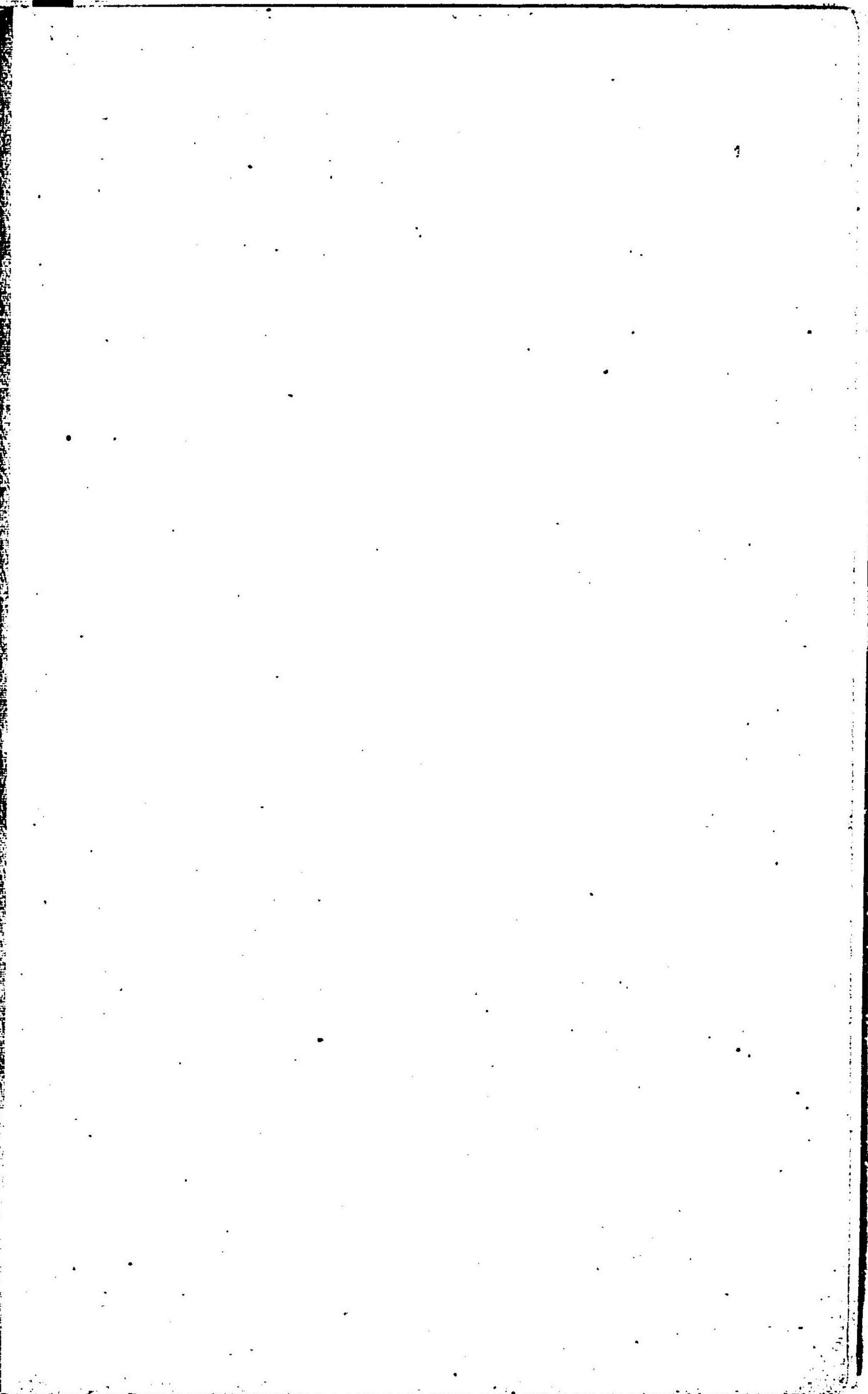
本書は、開卷の初にも標記したる如く、近松半二、松田猷、榮善平、近松東南の合作にて、三好松洛の校閲にかゝりたるものなり、その時代は、明和八年正月に成りたるものにて、今を去ること百二十二年、大坂竹田屋下で、始めて操劇に附したるものなり、書中の事實は、藤原鎌足が、天智天皇を輔けて、蘇我入鹿を誅滅することと本としたるものにて、死て大和の故事名所を湊合して作りたるものなり、この此事件は、當時大和にてありしことなればなり、即その筋の大略をいば、古今集に、流れては妹背の山の中に落つる、吉野の川の上しや世の中とある歌によりて、久我之助雄鳥の二人と出して、やがて妹背山といふ外題をあらはし、大物主神三輪山の故事によりて、おまじの緒環の事を作り、入鹿といふにつれて、春日の鹿のこととを取出し、さて又いふるかといふ魚あるより、これにまさる所の躰

を提出して、ふか七といふものを作り、日本武尊の妃橘姫の故事によりて、入鹿の妹を作り出して首尾よく入鹿を滅ぼすことをつくりたり、而して采女のこと、鹿殺のこと、何れも奈良にありし、古今の事柄を取集めて、一篇連続のものとしたる脚色いとめてたし、尚委しまことは、何れも頭注よものしたれば、餘はそれに譲りぬ。

妹背山婦女庭訓

目録

第一	一	頁
第二	三十八	頁
第三	七十四	頁
第四	百十一	頁
道行戀のをだまき	百二十六	頁
第五	百六十一	頁





能く切れるを利き
 〇九重 禁中をい
 〇久我の助 山城
 〇京の久我 地名
 〇所あり 地名
 〇が呼ぶ 地名
 〇呼ぶ 地名
 〇年 四十五歳
 〇比九ろ 角
 〇元服の風なり 古き

〇川の水を印に
 〇杭のたゆに
 〇詞のたゆに
 〇衣被るに 中古
 〇衣被るに 中古
 〇見ゆるに 時
 〇見ゆるに 時
 〇事なり 比

〇御寮人 寮は一
 〇住む 寮に
 〇住む 寮に
 〇住む 寮に
 〇住む 寮に
 〇住む 寮に
 〇住む 寮に
 〇住む 寮に
 〇住む 寮に

〇雛鳥の雛をい
 〇雛鳥の雛をい
 〇雛鳥の雛をい
 〇雛鳥の雛をい
 〇雛鳥の雛をい
 〇雛鳥の雛をい
 〇雛鳥の雛をい
 〇雛鳥の雛をい

て、何國の空や計り無き後の榮えを松の色操變らぬ君
 か代の例久しき春日野の社頭に近き小松原時雨晴れ間
 の狩戻り大判事が嫡子久我之助清船美男とも美童とも
 沙汰に聞えし角前髪それとは見せぬ簀笠に振りかたげ
 たる吹矢筒詣で休みの捨て床几これ幸ひと腰うち懸け
 勞れを休むる其折から本社の方より下向の一群れはで
 を揃へる風俗の中に際立つ武家育ち年は二八かそれぞ
 とも振りの袖のみみをじると豊のたゆたの絹被き姍あ
 また召し連れて打ち過ぎながら振り返り見合す顔も清
 船と互に月よ花の香の溢るゝ愛につゝくりと思ひに惱
 む立ち姿氣轉きかして侍女ども小菊コレ桔梗殿けふは余
 程の道お上にも嘸御草臥こちら床几で一と休み桔梗
 、小菊殿よう氣か付いたと附きくどもにいさなはれ

腰と思ひを掛けまくも神の教の縁かど心の中の嬉しさ
 に雛鳥は唯清船が姿に見とれ余念無し「イヤ申し御寮人
 様の最前から見ますればアレあなた持てござる遠眼鏡
 の様な物不思議に思し召すので有る無様ながら私が往
 て借りまして御目に掛う、ソ桔梗殿合點か」と黙頭き合ふ
 て隣の床几小腰を屈め會釋して、小菊イヤ申しあなた様に
 御無心がござります、此方の御寮人の申されますは御前
 様の持てござる其遠眼鏡の様な物暫しか間御貸しなさ
 れて下さりませ」と云ひ掛けられて久我之助「コレハく安い事、是
 は小鳥狩を致す吹矢筒と申す物、小菊、うしたら是が吹
 矢筒でござりますか、申し、御寮人様、是をマア御覽しま
 せ、雛鳥でも大鳥でも、アレあなたの吹矢を以て、くつしやり
 と射なざるのじや、マア此筒を、ちよつと握つてで覽しま

妹香山婦女庭訓

九

八

も手に入る人さす
へて戲ふる侍女
の詞也

○岩木にあらぬ
古語に人非木石日
有情と云へるより

○下行く水の云々
草などの茂りた
る下を流るゝ水の
こはれて人に知ら
るゝと云ふに忍ぶ
心の顯はるゝ壁へ
なり

○狭み道 武家の
外山の時替の衣
類を納れて供人に
持たす物なり
此時代には籠も
り箱も無れども
箱の時を摸せる詞
なり
○さやき竹 屏
の内外にて密話す
るに竹を屏へ通し
置く事あり 籠城
等の用意にて腰圍
にありし事なり

○耻紅葉 細とは
俗にはせとも云ひ
珠の木に似て紅葉
する物也 ちれを
恥て赤の赤らむに
云かけしなり

○興かるは 興が
あるはの略語なる
べし 興記 岩永
左衛門の詞にも同
語あり 参考すべし

○ていたらく 体
たる云ふ語なる

せ、どの様な所へでも心好う届きさうな、長ガイ物でござ
りますと戯言交りの戀の橋岩木に有らぬ清船も、完爾笑
顔相惚れに下行く水の溢れ口、すくひ上げて桔梗か氣轉
結梗「コレ申し御察人様、早う塔の明く様に、思ひの丈を仰し
やりませ、何をマア云やるやら、遂に逢見ぬあの御方へ、ど
ふマア直に云はれうぞ、私耻かしい」と袖覆ふ、折から社の境
内より、蝦夷子か家來宮越玄蕃、鎧狭箱殿めしく、代參の戻
り掛け、此場の体を見るや否や、供に制して狭箱腰打ち縣
けて窺ひ居る、斯くとも知らず侍女小菊、コレ申し、前髪の
御待ひ様、私か方の御察人様、申し度い事が有れど、耻かし
うござります、氣な、幸ひな此吹矢筒、咄しに聞た町竹、どう
ぞ聞いて上げまして」と耳と口とへ當がうて、小菊斯う此中
を私か持つ、取りも直さず媒役羅鳥は筒へ手を思ひ有丈

一ト口に言へばこなたは耳で受け、打ち黙いて返り言、可
愛らし事通し合ひ、互に嬉しさ耻紅葉、玄蕃主從夢現、侍女
どもは氣を利し、二人を床几へ押し遣れば、扇を開き寄り
添ふて、口と口とを鴛鴦の、ひつたり抱き付く、此方には、ぐ
はつたり、どつたり、こけ落るやら、鎧持は、鎧をこかして立
ち騒ぐ、清船も打ち驚き、床几を退けば、宮越玄蕃、起き上つ
て砂打ち拂ひ、玄蕃ヤア久我之助殿、余程に味やらるゝ、イヤ其
所な相手は、過ぎつる比相果てし、太宰の娘、コリヤ興がるは
スリヤ能い所出くはした」と聞て二人は又恟り、久我之助、ム、さ
ては太宰殿の息女なるか、御前は、大判事様の御子息、久
我之助様か、久我之助「ホ、過ぎ往かれし其方の父、太宰小貳と
我が父とは、故有つて遺恨ある家、其息女とは、夢にも知ら
ず、只今の体たらく、そんなら御前に添ふ事は、成りませ

妹春山婦女庭訓

にらくを添ふるに
ふを云へらくなど
○添ふは其人に
又人の添はるの
事なり、中古の詞
妻の事、具云へ
る事なり、似たる
語なり、

○今迄の事は論
ずとある意歎、め
語に似往はとがめ

○粹、順固にかた
まらす粹けて世俗
に通じたるを云ふ
○聖人は入世はる
悪心と包み世に聖
人を見せし由に聖
侍女の詞にて知ら
する文法なり、此
らねめ付けは、に
らみ付けの略語、
にとねと相通ずる
音あり、

○居合、居合は
刀を抜くを習練す
る武技なり、其技
少し居合後へ出し
る居合と云ふ

○成佛眼、死人の
快く眼を開ちたる
体をいふ

ぬか、ハアハツとばかりに早や涙、宮越は聞き咎め、スリヤ兩
人ははや、ちくつたな、久我之助否是必鹿相云はれな、遺恨有
る家ども知らず、最前の時雨の中、同じ床几に雨宿り、玄蕃ム
、成る程、今の雨宿り、其れなら其れに爲て置かうが、一体
此雛鳥には、某か大執心、それ故宿の妻に申し受んと兼て
より主人へ願ひ置く、ハテ今迄の事は、譬へ如何様な事有う
と儘よさ、此後心に隨へば、其處はぐつと了簡する、小菊此は
マアきつい粹様、私は雛鳥の召仕、小菊と申す者でござんす、
本にマア浮世ちやナア、入鹿様のやうな、聖人と云はる、御方
の親御に、ア、意地悪るの蝦夷子様、其御家來の小意地悪る、
此方の御寮人を嫁に爲うとは、笑止と打ち笑へば、玄蕃
院め付け、玄蕃ヤイ、くく女め、其過言覺えて居れ、是から直く
に御前へ馳せ行き、二人の様子を觸れ廻り、何奴も此奴も

身の上と駈け出すを侍女等袖にすがつて、侍女ア、コレ申し
今の様に云うたのは、御前の御心を引て見る謀、チ、正
直な御方では有るはいの、玄蕃ム、スリヤ身が云う様に取り
持つか、侍女取り持たいで能い物かいな、玄蕃チ、うれなれば
了管する、サア御娘か眞實に、應と云ふか、ソレ最前ちらと見て
置た、吹矢筒の叫竹で、聞きたい、侍女さても目早い御方
である、御望みの通り叫竹で、御返事を聞かじませう、サ
ア耳へお當て成され、チット心得吹矢筒、耳に押し當て居合
腰、玄蕃サアどふか、侍女コレ雛鳥様好い御返事を早仰しやれ、
ア、コレ玄蕃様耻しがつて、ござります、ちつどの間目を
塞いで、玄蕃チ、ヨシ、成程々々、うれも合點と眞赤な顔に似
合はぬ成佛眼、小菊は心得有り合ふ吹矢筒へ押し込み口
押當て、ふつと吹けば、宮越が耳へぐつさり、アイタタタエ、こ

○館へ 雛鳥打ち連れ立ち館へ
和にての由奥に有り
は十日余なるべし

○傳役 采女を
世に皇女なる時は
若し皇女なる時は
皇后以下は常の
采女なる故に傳役
あるのみなるべし

○出奔 今の詞に
失蹤 又は逃走な
とへるに同じし

○止事無き 上品
なる心の心なり
○上臈 元來女子
に限らず一席中の
長上をさして云へ
る詞なるが本にて
後には貴女の稱と
なれり

○后に立ん 后は
天子の御嫡妻なり
此他女御更衣は
皆御衣なり云へ
御衣格なり云へ
皇族大臣の女に
て多くは女御に
入内ありて皇子
生るに立中古
以後の風にして
古は最初より立
ありしなり
○入鹿 入鹿の
人なるが此時大
其の思ふ人思
作り也
○後日の難 云々
此詞後なる山の
難を起しし語な
しり付けて見るへ

りやどう爲る」と狼敗へる、其間に雛鳥打ち連れ立ち館へ
ころは逃げ歸へる、玄蕃は吹矢抜き取つて、堪忍ならずと
追懸るを、久我之助は押し止め、久我ア、是高の知れた女の
戯れ事、彼是云う程却て耻辱となどむる此方の咄道より、
數多の侍走り付き、清船殿にござる歎、方々と御尋申し
た、先刻采女の局様、禁庭の御殿を抜け出で、何處とも無く
行方知れず、貴殿事は采女様の傳役、早く御知らせ申しま
する」と聞て驚く久我之助、何采女様御行方知れずとか
や、何にもせよ程は有るまじ、貴殿方は是より直に所々
の出口を吟味あれ、我は山手を詮義致さん、玄蕃、聞捨て
ならぬ采女の出奔、蝦夷子公へ注進せん」と玄蕃諸共數多
の侍出口の方へ急ぎ行く、跡に清船たゞ一人、ハテ心得ずと
一思案、胸もしどろに入相の山手をさとして歩み行く、向ふ

より人音に身を除けて遣り過せば、さも止事無き内裏上
臈、心も空に歩み行く、袖を叩へて、采女様でござります
か、采女、ヤア久我之助か、久我、ハッ、唯今組下の注進有つて、采女様に
は御殿を抜け出で、御行方知れずと申すが、如何なる御所
存有ての事」と問はれて強き物語り、采女、其方も聞き及ばれ
ん、蘇我の蝦夷子威勢にほこり、我娘橘姫を、后に立てんと
兼ての望み、妾君に思はれ参らせ、夜の御殿晝の宴、暫も御
傍を離れぬ嫉み、父鎌足様をも謔言して、大内を遠ざけ、何
方に御渡り有りとも、此身さへ露知らず、妾か傳参らす程、
帝様御身の仇、誠有る入鹿の大臣、父蝦夷子を諫め兼ね、引
き籠り給ふ由、うれ故父の隠れ家を、尋ね求め身を隠し、姿
を變る身の望み、唯見遁しに頼むぞ」と跡は涙にくれ給ふ、
久我、ハ、此身は傳の役目なれど、後日の難義、少しも厭はず、御

○なる程 成可き
は本にて、後
に註する詞に
しなり、

○宵闇 満月の後
三四日過ぎて
は閑あるをいふ

○爰に居る百姓
を百姓と云ひ成
て侍等を欺くなり

○隠れ蓑 古歌に
鳥を我ゆけど名に
は隠れぬ物に有
けるに濡れぬやうに
へるを隠れぬと
ぬれぬと云ふに
は別なり

○涙の天か下 雨
り此詞に出たり
の中にも御意を
の御意なる故に
め近隣の御意に
く設けたる座に
○肉屏風 女を
多風集め其身体
て聞えたり此語
他に所見を得ず
ち古く人の道は
ふ事あり、意は
しなり、雪まろ
めを人形に作る
云なり、雪まろ
の事は源氏物語
も見えて古より
○しをり 葉の字
に當るは侍女の
名に作るなり、
○東帯 不脚の正
報なり、昔持統天
皇の御子あり、
國に酒を好め、
常飲に難く、父
家貧に難く、父
事な、或時多度
の瀧の邊を過り
しに、瀧の水に

身の爲、又第一は天子の御爲なる程落し参らせんが、諸士共
方々手配り致せば、村口を御供申し、欺つて御通し申さん
先々是を御召しあれ」と件の簀笠着せ参らせ、勞り出る出
口の方、又も大勢足音して、以前武士共走り付き宵闇混れ
透かし見て、土久我之助殿、いまた是にか、出口々々を吟味せ
しが、御局の行方知れず、久我、ホ、拙者は山路吟味の上、コレ爰
に居る百姓が、怪しき人見付し注進、未だそれとは極めねど、
大方に采女の局、我は是より此土民に、案内させて吟味を
遂る、各には此趣、急いで禁裡へ奏聞有れ、土、ホ、畏まり候ふ」と
皆々勇み大内へ、こなたは憂き身隠れ、簀笠に涙の天が下、
清き心の清船も、共にしぐれて行空は九重の榮に隣る一
構へ、三條の御所と持てはやす、蘇我の蝦夷が廣館雪見の
亭を設けの座、女小性を肉屏風奢に透間中庭の蔭を轉ば

すつかね雪、つめたところへ主命の、重き役目と宮越玄蕃
跡に荒卷彌藤次が臺に乗せたる雪人形、各機嫌を窺ひけ
る、女中達口々に、是はく御兩所のいかい骨折り、殊に
此雪細工、兎の耳がきつい手際、女中、チ、をり殿の云はし
やる通り、束帯姿の此の人形、寄麗な事じやないかいのふ
と譽うやされて、兩人は、おとなげなくも出かし顔、蝦夷に
つこと打笑給ひ、ホ、玄蕃彌藤次出來た、く、イザ酌取れ、
と餘念なく廻る盃、養老の盡きぬ泉の底はかど、案内もな
く廣庭傳ひ、入來る二人の僧、彌藤次見咎め、彌藤次、ヤア、く、兩僧、
何用有て罷り通る、御前なるぞ、とさきめ付ければ、伊、我々
は、御領分に住職致す、文聖寺、八乗寺、佛法歸依の入鹿様、今
日行法の満願の日なれば、拜禮に伺公せり、罷り通ると、奥
庭へ、入んとするを、蝦夷は腕付け、ホ、ヤア、いらざる入鹿が

○われかたれか云々
體に成りて格別
髪せし故なり
○文七八級
二に大坂の侍者
後大坂に至り侍
とたりしを中
の自ら含めたる
或は明和比大坂
名の文七八級は
に遠俗に此段に
俗の事取し其當
時あるべし然
一湯無功なれば
○長上下は
近來の武士の服
して元來大紋の
と云へり物なり
上下を本義とす
足利時代より起
此頃無かりしは
を例の當時に合
て作りし物なる

顔見合はせ、文聖寺、ホンニあんまりの事、いたおかしいわい、
のふ八乗寺、八乗寺、ササわれがられか、おれがわれか、どふも
濟ぬ頭に成た、ハテ是からは申合せ、何などして渡世する、貴
僧は是、文聖寺の一字を取り、文七と名を改めよ、愚僧は
又八乗寺の八を取り、八藏と付てこまろ、ヤレかはつた事に
なつたマア、文七殿、文七ホ、こはや、マアめでたうなつたわい、
こなたもろんなら、今から八藏殿、ム、ム、ム、とやくたい坊、
玄番彌藤次追つ立て、門外として出て行く、拆から表の
廣間口取次の青侍罷り出、大判事の子息清船、召に應じ
て參上と呼はる聲に入來る、久我之助清船、器量骨柄武氣
備はる、中に優美の長上下、禮儀正しく坐に付けば、蝦夷大
臣進み依り、珍敷や久我之助、使ひを立てしに早速の
入來、尋ね度事別義でなし、帝愛憐をかけ給ふ采女の局は、

れば、答るまでも
無きなり、

○思ひとり
はかるさ云へる如
○野邊の送り
送をいふ、されど
此名は火出出来て
後野にて火葬にす
り、より出たる詞な

○禮服
長上下をいふ、禮
服に限りての禮
服なり

○心に探りの見
夷の心を引き見
との説なり

鎌足が娘、此頃内裏を抜け出で、入水せしと聞つるが、其
方は采女が付人、實否を聞たく呼寄せたり、噂の通り違ひ
はないか、久我仰せの通り采女殿には、世をはかなく思ひ取
り、猿澤の池へ入水有りしが、我傳の役目なれば、野邊の送
り營み參らせ、いまだ三日を過さずと詳かに答ふれば、
「さころく、親鎌足が蟄居を悲しみ、淺間とい采女が成り
行き、其方付人の越度と成り、親大判事に勘當を受けたと
聞く、さ有れば主も親もなき身、夫れに何ぞやいかめしく、
禮服を着飾て、我目通りへ出でたるは、心得難き汝が心底、
久我ハ、御不審の段、御尤親もなく主君もなく、獨立の私、若輩
ながら蝦夷公へ奉公の義願ひ上度、君と敬ふ此禮服」と心
に探りの一思案、誠しやかに相述べば、上ホ、扱は此の蝦
夷を頼み、奉公の望みとや、若輩者の神妙く、我も望む所

○解 軍陣に解を
張りて其下に
するの義なり
家に云へる語を
用ひしなり

○さしつたり 然
爲たりとの語なる
へし、然のつゝま
りし也
○開いては 左右
へ横へたり
○懸らんすとする也
○尾 失敗さす
る如きに當る也

○エイウント 請
は「エイウ」は
掛けたるなり
ウケは「エイウ」
を受ける事なり
掛けたる事なり
上る文なり
○眞 眞劍は竹
の術を以てて
刀を用ひて其
爲る故に眞劍
なり

○の事を吹て少し
へたり古歌に「直
き木に曲れる枝も
ある物を毛を吹
疵を云ふがわりな
さ」
○用 此方には

なれど、其方が父大判事に、汝が勘當赦させて、親子共臣下
どなさん久我、コハ仰ども存せず、親大判事が氣質として、一旦
申出せし事、翻えらぬ鐵石心、勘當も赦さず、元より二君に
仕へぬ所存、ホ、其口こはき大判事、蝦夷が幕下に付て
見せう久我、ホ、其手柄にいか様共、親清澄得心致さば、其上も
なき仕合せ、所詮私一人の奉公が相叶はずば、とや角申し
て益なき事、先れ暇と禮儀をなし、廣庭にれり立て、しづし
づ歩む向ふの方、兼て云付け置たりけん、玄蕃彌藤次立出
て、前後を圍み二王立、ソレと蝦夷が下知に連れ、兩人一度に
切り付くるを、身を沈めば双方の、刃は合ひ打ちさしつた
りと開いて、又も横備へ、車輪の、鉄付込む切先、清澄心得左
右の柄元、しつかと握り、久我、蝦夷公の仰せ成るか、何故に尾
籠の手向ひ、ホ、不審は尤其方が武藝の試み、兩人に云

ひ付け置たが天晴く、久我、コハいかめしき御尋ね、若輩の私
なれば腕だめしの覺えもなし、猶此上に手練を極め、重ね
て御覽に入ませう」と双方を突放せば、跡へしさつて兩人
が、又も切り込む、又と又、庭の飛石、エイウント、請ければ、御殿の
天井、怪しく下る鐵網に、清船吃度、眼を配り、久我、コリヤ再三
のれ試、眞劍のれ相手が、お望みならば、兎も角も、二人、イヤモウ
驚き入た、お手際、見届けました」と双方の、刀は鞘に飛石も、
元へ直せば、御殿の網、棟木遙かに隠れける、久我之助さあ
らぬ體、久我、蝦夷公試の、切先を受け留た、今の飛石、地を放る
とと下る鐵網、元の如く石を置ば、網も隠れて、其體なし、ハテ
六、かしい御用害」と譽る一言きつくりと、術の試み、毛を吹
て、疵をくろめるしたり顔、ホ、太切の此用害、其方は身内
同前、見せて置も幸と、俄になつける詞はの艶、久我、ハ、此清

用要とし、敵には害となる故の名なり、要害と書く方本能なるべし、方○身内、家族といふか如し。

○めどの方、めどは宮中に馬道ありてめどと訓む、是によりし、又木をめぐり、云ふ事あり、古くは鹿の引の骨を焚きて占ふ術ありし故に、入鹿の妻なるを以て此算木の名を兼りしか二箇の中なるべし。

○定に入るといふは、なり、地、埋、葬、す、行ふ事、弘法大師なり、其類なり、物、給ひ、音信の義にあらす。

○天竺外道、外道の意、佛法の外、佛を信ぜざるの事なり、にて出家の事なり。

○怒の風も云々、心の和を海上の波をよぶに、怒の風をよぶに、怒の風も云々。

船も武士の端、只今如きの御手配り、決して他言は仕らぬ、御氣遣ひ御無用と暇申して久我之助、左右に目配り悠悠々と、表をさして立ち歸る跡に、蝦夷は溜息の、一間の襖押し明けて入鹿大臣の妹橘姫跡に續いてめどの方、舅に心奥の間は、けふの酒宴にかけ合はぬ、鉦の響も身にしみく、御機嫌いかゞと、兩手をつきめどの方、御酒宴の半ばながら、なれた様へ御願ひ、夫入鹿大臣には、秋の頃か一向に佛の道に入り給ひ、奥の亭へ引き籠り、一つの棺を地中に納め、丁どけふが百日目、入相の鐘を限りに、定に入給ふと聞く、何に譬ん此身の悲しさ、何と便りが有物を、少しは思ひやり給ひ、お諫めなされて下されと、涙先立つ、吃言、同じ歎きを、橘姫何卒再び兄上様、遁世の思し立ち、とゞまり給ふお願ひ、と一つ思ひを二人して、いふを打ち消す父大臣、ふか「ヤア

聞たくもない、入鹿めが沙汰、今此蝦夷が威勢に次ぎ、何不足なき、榮花を捨て、佛法といふ、天竺外道の術に歸依し、奥庭へ引籠り、晝夜わかつ稱名讀誦、此世に有て益なき、悴土へ成と定へ成とも、入次第にして置めせ、また最前から鉦か鳴、エ、いまはしい不幸者、嫁も娘も重ねて云まい、二人「ハイ、い、やまだ不吉な泣聲、此酒宴を妨ぐるか、二人「イエ、く申、何のマア、御遊興を妨げませぬ、モウ何にも申しませぬ、涙もこぼしは致しませぬ、御赦されて下され、と袖に解行し、ほり雪、思ひは胸に氷るらん、橘姫引取て、申しど、様、モウ兄上入鹿様の事、申者はござりませぬ、御機嫌を直されて、別殿で御酒宴を、ホ、娘能いふた、是よりは居間をかへ、再宴を催さん、玄蕃彌藤次も、奥へ來よ」と、怒の風もなぎの、かち、共が取々に、一間へ伴ひ入にけり、橘姫心せき、娘、父上の

○昇殿の心にて
進下りし人
なす何れと
ひりて名に
ひる名を
入鹿殿と
元々如く
○築山の門
○山へ穴を
○文に築山
○如く開ゆ
る元々如
ら入鹿殿
ひる名を
入鹿殿と
元々如く
○築山の門
○山へ穴を
○文に築山
○如く開ゆ
る元々如

○假名遣なり
○假名遣なり
○假名遣なり
○假名遣なり
○假名遣なり
○假名遣なり
○假名遣なり
○假名遣なり
○假名遣なり
○假名遣なり

○浄土に生れ
○浄土に生れ
○浄土に生れ
○浄土に生れ
○浄土に生れ
○浄土に生れ
○浄土に生れ
○浄土に生れ
○浄土に生れ
○浄土に生れ

あのお氣質何程に願ひ遊ばすとも、聞入は有まい、是よりは此橋、大内へ急ぎ参り、何卒兄上入鹿様、入定を止まり給ひ、再び昇殿有様に、幾橋のお局へ、願ひ申心ぞと力付くれば、めどの方、難面は入鹿様、今日を限りの入定と、生き別れのわたし、が身、同し、館に有りながら、暇乞にお顔を、と願ふ事だに中々に、築山の門を閉じ、物いひかはす事さへも泣て暮しておりますと、むせぶ涙を、友千鳥、同じ翅さ、に露時雨、しのぐ方なき思ひ也、姫は涙を打ちはらひ、めぐど様氣遣ひ遊ばすな、暮を限りの事なれば、一刻も早う、自らは大内へ、それは一人御苦勞ながら、是はマア改まつた、わらわとても同じ事、ソレも、大内へ上る用意せよ、畏まつて附くが、興乗物といふ榮の、日頃中よき嫁小姑、互に力付け合ふて禁裡をさして急ぎける跡見送てめどの方

便りすきなき身の上を、諦め兼し胸の内、譬ひ願ひが叶ふとも、心變せぬ夫の氣質、うれど知りつと頼みしも、妹御の深切を、破らぬ誠とやかくと、思ひ續けて庭におり、水草の拈羽、詠めても、猶いや増しの無常心、夫の命もけふ限り、涙は胸にふり積る雪かき集めかき寄せて、氷る手先も、後世の爲め、束ね丸ろめて五輪の形、此世の名は入鹿大臣、頓生菩提と手を合せ、心の回向せぐりくる聲も、憚る、しめ泣に哀れは、かなき風情なり、うれに引きかへ、奥の間は、地下を寫しの三味線に、なまめく歌の聲さへて、花はちりても、春は咲く消て返らぬ其雪にさへ、おどる憂き身は、消もせで、あんまりと言はふか、心無いといはふか、現在子といひ嫁といひ、けふを限りの命ぞと、悲しむ事を聞き捨て、捨てた浮世にかうして居れば、仇名たつたの流れの錦

妹脊山婦女庭訓

の出来たる比の三
味線は隆達ぶしに
歌の中なるを引し
なるべし、浮世云々
捨て、どの方の開き
三味線の歌にて捨
てた云々、引出す
向なる面白き趣
か、置を、三勝半七
へ、所に同趣あり
へし、より出しなる
一、けさよりつもる
兼、ね、今、朝とを
ひろ、け、別して此云
ひて、下に、染、さい
妙々、自ら、かけ、合、ひて

○うもや、抑の鏡
にて、詞を、改、る所に
いふ事なり

○様子なうては
し、他、の、事、實、あるべ
し、也

○我つよう、我さ
は、我、思、ひ、の、儘、に、爲
る、心、を、云、ふ、

○上から見えぬ
下、入、鹿、の、下、た、心、に
何、事、か、あ、ら、う、た、心、に
け、ぬ、と、は、い、ふ、な、り

めどエ、心ない此中で、雪見の酒宴所かい、ア、鐘の折納め
が、入鹿様の御臨終、夫を先立て何樂し、我も一所に此雪
ど、俱に未來の道連れと、上着を脱げば墨染の、けさよりつ
もる廣庭の雪に座をしめ合掌し、此儘爰に埋もれて、死ん
ど誓ふ貞心は、天に通じて降し、膝も袂も白妙に、色香
盛りの黒髪も、八十の姥と疑がはる、恩愛血筋に屈詫せぬ、
蝦夷大臣一ト間を出て、嫁めどの方、またそこに泣て
居るか、ハテ扱々こくにも立ぬ馬鹿者の、入鹿か事を苦に病
み、物好きな雪なぶり、もふ打やつて爰へ来て、火に當りやれ、
めどアノ胸欲なれつしやり事、夫は定に入り給ふに、うもやま
あ妻の身で、褥の上に居られませふか、雪に凍へて死るの
が、せめてもの夫婦の誠、ハテ貞節な心底、其實心を聞て、
お身に問たい事が有る、忤入鹿が入定は、佛法信仰斗りて

有るまい、様子無うては叶はぬ筈、親子に増る夫婦の中、夫
の心知て居やう、イヤサ何ぞ密に聞た事があらふがな、サ其
子細が聞きたい、我強うはいふ物の、實は不便な子の命、様
子によつて入定を、止る思案有まいともいわれぬ、どふじ
や、く、と脇道から、猫撫で聲も氣味悪るき、イヤ、エ親御様
さへ御存じない事、何のわたしが知て居ませう、去りなが
ら、脇目から存じますは、夫入鹿様のお覺悟はお前様のお
心が知れぬ故かと存じます、ま、く、く、く、蝦夷が心は今
ふる白雪、一目に見えて有る潔白、サア其雪に埋もれては、上
から見えぬ塵芥、心の底がどふも解けぬ、入鹿が性根聞た
いく、めどイヤ申、常に夫が申さるゝは、内大臣鎌足と父蝦
夷は、國に二ツの柱同然、一つかけても我君の、お爲になら
ずと物語り、其大事の鎌足様を、追退うけなされたには、深

○さかしら事 邊
 ○耳に入鹿 耳に
 かけし詞なり
 ○て、こて、は
 せしなり
 ○合す兩手 夫と
 詞より兩手とは受
 しなり
 ○十位の位「天子
 の御位を云ふ、災
 し、くはしく云ふへ

い様子有りろふな事、ハテ知れた事此蝦夷は忠臣、
 佞人の鎌足をばつ下したは天下の爲、我君のお爲じやわ
 いめど、イエ〜く、鎌足様に罪ない事は、世上の人がよう知て
 おりまする、威勢を妬みろねんで、さかしら事と世の人
 の譏りは耳に入鹿様、夫れが積つてあのお覺悟、一人の榮
 花を極めんとて、譏も返り見給はぬ、蝦夷様のお心さへ、改
 めて下されなば、入定も止まり給はん、夫の生死は爺御様
 のお心次第、嫁子不便と思し召し、お聞入下さりませ、夫婦
 が命は厭ねど、お心が直らねば、お前も遁れぬ危うい命、君
 の御恩を受ながら、十善の位を奪ふ、御謀反の思し立で、ご
 ざりませふがな、天道様の御罰にて、お身に報ふが悲しさ
 に、わらはが御意見悪心を、止まつてたへ、蝦夷様と舅を思
 ひ夫を思ひ、合す兩手にはらく〜と、涙深山の瀧なせり、始

○すりや「其はと
 いふを約めてうり
 やとひひ又うをす
 に轉せし辭なり
 ○下駒下駄 公卿の
 物語に類光公の
 きに紙に見えたり
 は枕草紙に類を
 ○枕草紙に類を
 得る心有り海を
 心あり海を
 荒海あり海を
 底は白洲にかけし
 底は白洲にかけし
 白洲にかけし
 ○道立てする「君
 臣の道立てする
 嘲る語なり、前
 嘲る語なり、前
 嘲る語なり、前
 嘲る語なり、前
 ○甲斐無き言ひ
 せし言ひを發語に
 ○連判状 一味の
 名を認めし花押
 印占近世の事に
 中占近世の事に
 判占近世の事に

終とつくと蝦夷大臣、モウよい、ずりや我大望、残らず入
 鹿に聞いたよな、ろふ有らうと思ふた、氣遣ひすな、うち達
 ちが望みの通りにしてくれうが、まだ尋ねる事が有る、め
 どの方駒下駄直せと刀提げ庭の面も、しや得心有る海、底
 は白洲にあやぶむ目遣ひ、嫁近ふよりやハイ〜と立寄
 る目先へ氷の刃、ハツと飛退き、舅御様、うんならどふでも、
 思ひ止るお心はござりませぬな、馬鹿盡すな女め、天
 下を取らば肉身の入鹿、譲りくれんと思ひの外、道立てす
 る倅にはもう構はぬ、思ひ立た大望、一度萬乗の位に昇る
 此の蝦夷、エ、ふがひなき性根としらす、入鹿に渡した連判
 状、儕が有所知て居よう、イエ〜く御謀反の譯は聞たれど、
 連判とやらは、イヤぬかすまい、一大事を聞た女、殊に安
 倍の行主が娘、所詮生けて置かれぬやつ、云ふても殺す、云

妹背山婦女庭訓

○一巻「昔は書物
して巻紙の如く巻
きておきしなり
○こけながらへの
語なるへし
○火鉢に此下に
掛け入る事をい
ちす文法なり知
らざる昔は太鼓
の相違を以て大
に序破急の三つ
み鐘又大鐘にて
上鐘にて常人を
引進

○貝鐘「貝は法螺
にて此も軍陣の相
國に吹きしなり

○帳臺「高貴の人
の座にて四方へ几
帳を立て廻らし
八重疊大床子など
云ものあり

○細殿「後世に廊
下と云へる所なり
○路次「途中をい
ふ貴人の稱なり

○かすゆんと「盗
ん云か如し、盗
○叡慮「叡開叡感
なり、すべて天子
の御事を申す語な
り

○武官「六衛府と
て近衛兵衛衛門に
各左右ありて六衛
府と云へるなり
○居丈「高前に
注す

○勅答「勅詔へ對
したる答辭なり

はいでも殺す、其一巻爰へ出せば、苦痛せず、一思ひ、あら
がふとなぶり殺し、サア、何と、付け廻す、遁れがたなに
肩先すつぱり、付込蝦夷が尖どき切先、手負は大地にこけ
ながら、蹴上る白砂雲烟、手に渡さしと懐中の、一卷火鉢に
燃立炎嵐に連れて烈々と折しも聞ゆる鐘太鼓、み「ヤア、い
ぶかしき攻鼓連判状を焼捨しは、我大望を蹙たる、不孝の
入鹿夫婦のやつばら、大事を敵に洩せしな、につくい女め
思ひ知れと、足下に踏付け肝先を、えぐりくるく流る、血
汐、雪を染なす皆紅、眼血ばしる表の方、勅使なりと呼はる
聲、み「ム、貝鐘の音に引きかへ、勅使の案内は、我胸中窺ひ
さぐる謀身体けふの一舉に極る、装束せんと不敵の蝦夷
帳臺深く入りけり、程も有らせず細殿傳ひ、入來る勅使
は安倍中納言行主、副使の武官大判事清澄、威儀を正して

座に付けば、出向ふ主も衣服改め、上座に招じ頭をさげ、み
し「お勅使として行主殿、雪中の路次、別して御苦勞に存す
る」と挨拶終れば、膝を寄、行主、今日の勅使、尋常のさたにあら
ず、貴卿は父馬子より、代々の功忠勤あつく、君の寵にほこ
りたるや、ほゞ逆心の徒をかたらひ、帝位をかすめん企て
有り、と、叡聞に達せし故、諸國の勤番武官の面々、此館を圍
む所、此行主は一家の佳み、今老臣の蝦夷子大臣、鹿忽の斗
ひなすべからずと、進み出て使を乞ひ受け、取りあへず馳
向ふ、包まず言上申されよ」と聞て、蝦夷子は居丈高「ハ、く
く、何事かと存じたれば、此老人に逆心有りとや、最前よ
り遠く聞ゆる鐘太鼓、ス、禁庭に大事有と、思ふ折から我家
へ勅使、佞人讒者の詞を用ひ、叡慮くらき帝の疑ひ、勅答致
すも馬鹿く「しい」と詞ば尖どに云放せば、大判事進み寄

○血迷ひ給ふか蝦夷子公、其身の白狀進め給ふ、行主
公は一家の佳み、叡聞に達する大事、再三吟味有ての事、い
か程にあらがはれても、抜きさしならぬ證據有と懐中よ
り取り出たし投げやる一卷おつ取て、見れば覺口の連判
狀、序文の手跡、誓書の名印、さしもの蝦夷も證跡に、ハット斗
り驚く面色、行主、ナント見られしか蝦夷子殿、我輩の入鹿大臣、
此一巻を帝へ捧げ、諫めても承引なき父が逆心、子として
是を顯はす事、不孝の罪莫大なれども、君恩にかへる道な
ければ、叡聞に達する也、我は祖父馬子が意をつぎ、佛法に
歸依しぬれば、遁世の外なしと、引籠りめさるれども、我娘
めどの方謀に命を捨て、最前焼き捨し、贖物の連判狀は、誠
に逆心有るかなきか、しらせの狼烟、貴殿の口より謀反の
次第、最前既に白狀の上、最早陳ずる詞はあらじ、ナントく

○此謀反の手跡、味は
○字文の反、味は
○上は、天中、大小、初
○め、日本、中、大小、初
○記、物、可、旨、を
○へ、神、明、に、上、に、云
○に、て、名、印、は、前、に、花
○押、な、り、姓、名、と、花
○は、馬、子、か、意、を、つ、ぎ
○天、皇、の、朝、に、佛、法、始
○用、て、渡、來、の、時、其、信
○と、心、を、合、せ、諸、天、子
○は、寺、院、を、建、立、し、又
○或、は、佛、物、部、守、屋、の、歷
○起、し、守、屋、を、亡、に、兵、を
○起、し、大、屋、を、亡、に、兵、を
○に、意、を、繼、ぐ、と、は、云、故

○既に白狀は「め
○せしをいよ、開か
○三方に切腹刀
○源朝より始まり
○て其以前は無き
○以後武家の形を
○さて此頃の死罪自
○殺も其人に非ざる
○人形の實の人間な
○らぬを、蝦夷子に譬
○へしなり

○かたわ片船
○も、刀取り、後
○段に介錯とあるを
○本義とす、武勇あ
○る者の役する也

とさめ付られ、一句一答詞なく、只黙然たる斗りなり、大判
事さし心得、三方に腹切刀、蝦夷子が前に指置ば、行主立ち
寄り傍なる、雪人形手に取り上げ、行主、コレ見られよ、愚成る譬
へなれど、此束帯の雪人形、其形ちをなすといへども、火に
當れば、忽ち水、其人にあらざる逆心、消果るは天の御罰、せ
めて最期は此雪の如く、潔よく生害有れと諫めの詞を耳
にも入す、無念に堅まる雪人形、傍なる火鉢の炎の上、つか
み碎けば、水烟り、肌押しくつろげ、腹切刀、腹に突立て、怒の
眼中、エ、無念口惜や、仕込み仕込み、我が大望、現在
の悴入鹿が手より洩たるは、我運命の盡る所、去りながら
此蝦夷子世を去らば、見よく、忽ち天地は常開、かたは者
の帝を始め、月卿雲客思ひ知れと、きりく、と引き廻す、太
刀取後ろに大判事はつしと、落す首諸共、矢一つ來て行主

つちぞろ 刺藜の
字を寄く一種の草
にて、衆の刺れし
を形容せし詞也
○有髪の僧、刺髪
せぬ侍なり、今行
者云へる者に似
たり

○其器少く器
は則ち器なり、
大事を成し難しと
なり

○行法の築山筑
山に籠りて佛法を
行ひ居たるをいふ
○寶藏の三種の以
て云は武家の三種の
神器は如く寶藏
の類は如く寶藏
す、玉座の次に非
に

の胸板射拔きあへなき最期、こはそもいかにと悔り仰天、
十方にくれて立まどへば、入鹿清澄、必驚く事なかれ」と聲か
けて一間の襖二人の武士に引拂はせ、築山の岩間蔭しづ
く出る入鹿大臣、髪はおどろに麻衣、さもすさまじき有
鬚の僧形、大判事きよつとして大判事、ヤア入定有し入鹿公、ふ
しぎの對面いふか」と立寄れど入鹿ホ、實にもくくさも有
らん、不審の一條語つて聞かせん、父蝦夷子年を重ね、反逆
の企て有れど、其器ちいさくして、中々大望成りがたし、爰
を以て此入鹿表には仁をかざり、父の惡事をうとめる容
佛法歸依と引籠り、帝を始め數多の公卿、父蝦夷子に心を
付け、油斷の間を行法の築山より禁庭の寶藏へ隠れ道土
を掘り石を穿ち、妙計違はず忍び入り、とくより評定有り
しに違はず、神璽御鏡失ひ給へど、村雲の寶劍は安々と手

に銀殿の間と云へ
る有て、其時に常
に飾り置けり、時
に銀殿の内付とて
之を取持て奉ると
事なり、然れども
爰はケ、瑠璃に作ら
ぬ故なり、出陣の
時人を殺して軍陣
を祭る事也

○三德 智仁勇な
り

○殿せよ 行軍の
終りに地位して尾
擧する勢を拂ふ役

に入たり、父が命妻が命、芥の如く見捨しは、此時を待つ謀
あら心地よや潔よしと、御殿に響くうなり聲、扱はど驚く
大判事、玄蕃彌藤次弓と矢つがい取かこめば、大臣重ねて
入鹿馬鹿者の勇行主、血祭りに手にかけた、其方は我所存有
れば、味方に付けば其通り、否といは、行主同前、サア勝手次
第に返事せよ」と大惡不道の入鹿が行跡、爰う大事の大判
事、心を定め低頭平身、大判事時を得給ふ大臣に、いかでか違
背申すべし、我君と仰ぎ奉る」と申上れば、つこと笑ひ入鹿
ホフ潔よし、三德備はる此入鹿、天地の間に狹まる物、誰
か歎たふ謂なし、今日より我こそは萬乗の主たり、アラいま
はしの黒衣、いでや衣服を改めん」と呼はる聲に、數多の官
女、手ん手に着せる綾錦立なほつて、大音上げ、入鹿清澄は、皇
居の案内、玄蕃彌藤次殿りせよ、是より禁裏へはせ向ひ、帝

妹脊山婦女庭訓

なり、御勅當を蒙る者
 ○今日事を糺す
 前の段、蝦夷子切
 して、此段を見る
 へし、見る如し
 ○目下、見る如し
 免許、勅勅御教
 先ある也、勅勅御中
 ちらぬ、参内を停め
 する如く、今より
 密々相知らせ、前
 武官も、供奉せぬ趣
 なるべし、合せ見る
 ○介借、切腹する
 死せしむる役なり
 多くは首を打つ
 〇村雲の御劔三巻
 神器の中に齎るる
 所の尾より此物大蛇
 り故に村雲の起る
 名多し、村雲の起る
 〇四海の主天子
 は四方の海上まで
 なり、知ろし召す故

法に取籠つたる入鹿大臣、寶藏へ忍び入り、村雲の御劔
 を奪ひ取り、誠は蝦夷に越え、王位を望む大悪人行主も、忽
 ち手にかけ、禁庭へ馳込たり。是に支へる公卿の面々、或は
 蹴殺し切り倒し、上を下へと逃げさまよひ、さしもに廣き
 禁裏の内、人種も盡ん斗り、猶も追々注進と呼ばり捨て立
 ち歸る皆々はつと驚き、わきて帝の御歎き、魚いかなる
 天の咎めぞや、思ひ計らぬ入鹿が悪心、我れ四海の主とし
 て、臥所さへなき身となるは、淺間しき境界と歎かせ給ふ
 を淡海は、御心よわき御仰と、勇る中に思慮を回らし、竊か
 に官女の耳に口申し合せて、車に向ひ、思ひがけなき只
 今の注進是より馳付け遠見を致し、安否を言上申さん」と
 出で行くふりの偽りも目じいの君の御心地を、休る術て
 こなた成る木影に暫し、息を中取々いさめ奉る暫く有

〇只今遠見以下
 淡海、公方、以下
 の如く、如く、以下
 〇如く、如く、以下
 〇入御、御出、以下
 〇何れも、天子の御事
 〇長柄、牛車の前
 へ、長柄、牛車の前
 〇字、木
 〇字、木

〇世子、山狩の時
 鹿を追出す者を
 〇爪黒、爪の黒き
 鹿なるべし

つて淡海は急ぎ歸りし足音して、御車近く息をつき、只
 今遠見致せし所、諸國の軍勢熾のこどく禁庭へ馳参り、さ
 しもに猛き入鹿大臣、直に退け候へば、忽ち内裏は穩か
 なり、早入御ならせ候へど、誠しやかに相述べば、主上は安
 堵の御思ひ、御悦ひは限りなし、淡海は官女を制し、急いで
 還御と先に立ち、長柄を取りて、舍人役押し行衛はいづ
 ことども、空定めなき空いさみ、露踏分けて、躑り行く、山手
 の道より親子連れ、爰に名高き狩人、芝六、弓矢手狭み、いつき
 せき人絶の木影に立ち留まり、聲を嘯め、コリヤ三作、此間
 から夜るの狩、是は渡世の表向き、履ひのせこども山手谷
 々々、方々どかけ廻す、此物音の騒ぎに、紛れ兼てそちに云付
 た、彼の爪黒といふ女鹿は、千疋が中に一疋、其れ取りたい
 ばかり、此様に骨を折る、其の念力が通つたやらア、葛

吹螺 法螺貝を
吹き、法螺貝を
元來、軍陣に用はる
物を、山狩に摸し、
○所の法度、奈良
春日、神社の遺物は
を殺す者、死に
に處せられしなり

○榮耀、名譽富貴
○所詮、今の詞に
たる底と云ふに似
たる意なり

○おれ、おのれの
稱、語にて、自身を
稱す、おのれの
おれ、おのれの
おれ、おのれの

籠山の向ふの谷合見付得た其爪黒ア、猪狩の螺鈺で、ぼつ
立たら驚いて向ふの山を越すは必定、うちには是から谷へ
廻り、青顧に螺鈺打鳴させ、件の鹿を追出せ、三作、心得
ました、シタガ是とつ様追出すは安い事じやが、鹿を射るは
所の法度、お前の身に難義が出来ては、かゝ様やわしが身
はどふしませふと雅氣に後を案じるさかさは、孝行見
て不便也、ハテ扱氣のよわい事を云ふ、うれ知られて堪
るものか、若し知られたらば百年め命がけな事するもの
此身の榮耀を望むでない、所詮此狩人、商賈、人間のする業
しや無い、せめて我らには狩人がさせとも無く侍にせう
斗じや、どゝが身に氣遣ひはない程に、サア、早く谷かけ
へ、おれは別つて麓の方、合點かぬかるな、心得た」と示し
合せて親と子が、道は二筋引き別れ、山路をさとして、急ぎ

○仕留めた鹿に
打ち、仕留めた鹿に
打ち、仕留めた鹿に
打ち、仕留めた鹿に

○三笠の日本の中
に、三笠の日本の中
に、三笠の日本の中
に、三笠の日本の中

行く谷山峯に輝やかす、數の松、明螺鈺の響きに連る、青顧
の聲、松の嵐も驚すとき、スハよき時分と芝六は、弓矢つがふ
て麓の方、木影に隠れ待つ所へ、猪を狩出す山路の騒ぎ、俱
に驚きかけ来る鹿、件の爪黒得たりやつと、切て放す矢あ
やまたず、鹿の咽吭貫きて、其儘うてへ倒れ伏す、三作はか
け付けて、三作と、様射留めさつしやつたか、三作、シイ聲が高い
ナ、首尾よう仕とめた、三作、爺様どうやら怖ふ成りました
と身を震はして涙ひる、ハテくどくと氣遣ひ爲な、人の
見ぬ中なれば、濟むと傍り見廻し心を配り、鹿引かたげ親
子連れ、宿りを差してぞ立ち歸る、三笠が本の雨、舎り烈し
き嵐吹きこして、君が御遊の御車は、此藁家に駐まりし、獵
師、芝六が、住居妻のお雉も、忠やかた、つかへ参らす大君
の供御の仕掛の米粒を撰むも、女中の手談みに、紺の蔽膝

妹脊山婦女庭訓

伊勢物語に、まめ
又、お前、お直
心、お付、お云、お
飲、お供、お天、お
○米、お粒、お米、お
一、お粒、お米、お
或、お不、お分、お
撰、おみ、お去、おる、お
○下、お馬、お緩、お怠、お時、お
依、おり、お官、おに、お上、おり、お
下、お馬、おす、おべ、おき、お下、
馬、お為、おべ、おから、おさ、お
る、お節、おに、お下、お馬、お
を、お却、おり、お下、お馬、お
なる、おる、お下、お馬、お
○し、おし、お下、お馬、お
俗、おに、お居、おる、お体、お也、
膳、お番、お武、お家、お役、お名、
天子、お膳、お番、おは、お内

緋の袴打交りても女子同士、つい馴安きならひなり、おまじ
「ホニいか様、上々様といふ物は、此様に一粒く米を撰り、
是はちつと色が黒い、是は角が欠たのと、皆撰り出して、上
ます米は二粒か三粒、神様より大切な、十善の主様、斯なう
てはならぬ筈、是を思へば、勿躰ない、王様に上る供御を踏
確踏は、足が腫うといへば、女中が、何のいな上様でも肝
心の時は、やつぱり白がお好でな、勿体ないところ、ちから
遠慮すれば、けつかして、下馬緩怠とお呵りなさる、と笑ひ
綻ぶ障子の中、しほたれ公家のしよげつばさ、しよんぼり
と立ち出で、お家、アウ、上、藤、夜も早初更に及びしに、夕御
前の供御、何として遅なはる、膳番は何國に居る、怠りなり
と呵らる、ホ、お公家様方とした事が、やつぱり禁裏
の格式で、何の、獵師の内、うんな、仰山な、膳番とやらが

膳正、又は高橋な
て、供御を司る、
官なるべき也、
○仕、お丁、お仲、お造、
さ、おもの、おか、おつ、おこ、
役、おな、お禁、お所、お除、
○御、お所、お火、お清、おむ、お
なり、お火、おを、お清、おむ、お
○御、お門、おの、お出、おし、お入、
る、お也、お云、おへ、おる、お女、
○事、おじ、おや、お夕、おい、お
か、おけ、おた、お夕、おい、お
ゆ、おけ、おた、お夕、おい、お
然、お共、お朝、お臣、お再、お記、
向、おは、おれ、おに、お再、お記、
一、おと、おは、おれ、おに、お再、
瑠、おは、おれ、おに、お再、お記、
○米、お粒、お米、お
む、お歩、おの、お意、おな、お
寛、お歩、おの、お意、おな、お
を、お風、お流、おの、お衣、お
姿、お古、お人、おの、お衣、お
物、お列、おす、おに、お市、お
り、お云、おふ、おを、おね、お
の、お風、お山、お家、おの、お
様の、おね、おり、おも、おの、お

有物か、あなた方には、御存じない、貧乏世帯といふ物は、何
も角も、たつた一人、むつくりと起ると、釜の前庭の掃除は
仕丁の役、お清所の飯焚役、鑪の出し入れ、内侍役、どんと仕
廻しまふて、寢所がお后様、百人前する事なら、手の廻らぬ
は、御推量遊ばせ、此又、こちらの主様は、遅い事じや、と夕やみ
に、山を仕廻ふて、親子連れ、いきせき背に、大風呂敷、寒風に
汗だらく、おりの我家の門、噂、今戻つた、と内に入り、
「コレ、太切なお方々、なせ、端近ふ出します、お前方も在
所の、遼もの見るやうな、其、大ろふな、お姿で、によろく、出
て、ござつては、何ぼ、ふ山家の、一つ家でも、誰見まい物じや
ない、お局方も、年中、神子殿の様に、其、長い物を、此、狭い内
引き、すつたら、裾踏で、轉さつしやる、夫で、コレ、奈良の町で、よ
い流れ、買ふてきた、サア、是をお召かへ」と、風呂敷解て、取出

ては、見ざる故、
 ○神子殿、神子は
 似たる姿なる故に
 山家にていふ詞
 の流に、今の賈物
 の流に、既に新賈
 物の事は、既に新
 式目にも、鎌倉の
 比より、有り事の
 交せて、細りし帯
 地也、細りし帯
 ○矢背のげ、山
 城、蘇我の女にて
 大原女とも云る
 物なり、けは、
 下々にて、車賤の
 義なり、
 ○おちや云々
 女の名を、於何と
 云へるなり、
 ○お梅か香、お梅
 と云へるなり、
 添へしなり、香を
 上殿上人三位を
 位以下殿上人四
 以上、人殿上人
 上といふ、其處に
 候す

し、着せるとでらの行尺も、哀れきのふの長袖を、在所小紋
 のかます袖、似せ兜羅綿のひらた帯、ねから似合ぬ御装束、
 矢脊のげげを見る様な、名もかへて右大辨助様、お前は、大
 納言兵衛様、こちらか髪も町風に、島田とやらに結直し、
 あちやおいぢや、お梅が香、在所のか、の風俗は、憚りな
 がら私が傳授、ア、こりやか、上様の御膳は、まだか何れ
 も様も、無御空腹にござりませう、公家、イヤ、く心づかい無用
 く、帝さへ御安體なれば、臣等が事は、苦しからずと殿上
 人も世に連れて、か、り人の身の氣の毒顔、ア、イヤ、く何ぼ尋
 常に仰しやつても、内裏様も喰にや立たぬ、思ひなしか昨
 日、からめつきりとお顔が細つた、か、マア、ちやつと握り飯
 などして、上いと亭主は、如才内證の、しがをくろめて入所
 へ、腰に帳面ぶらく、爰へ郡山の搗米や、米、内方にごんす

るなり、
 ○おちや云々
 女の名を、於何と
 云へるなり、
 ○お梅か香、お梅
 と云へるなり、
 添へしなり、香を
 上殿上人三位を
 位以下殿上人四
 以上、人殿上人
 上といふ、其處に
 候す

か、おちや、新右衛門様、ようお出たれど折悪ふ今日は、米、チツ
 トお内儀又留主といふのか、晦日に來ると、いつでも朝か
 ら内に居ぬ故、けふは留主を言わさぬ様に、氣をかへて朔
 日に仕かけた、拂はぬ癖に、節季に書出し、なぜおこさぬと
 小みつがいやさ、コレ持て來た此書付、去年の尻残り、が六
 十六、又三分五、りん、いつまで釣り付るのじや、ぶづくられ
 ては居ぬ男じや、サア、く、今拂うや、今受取う、と傍響す聲
 高く、大納言押と、め「天、こ、」ヤ、ヨ、下々の者、いとほしたなき、争
 ひかな、しづまれよや」と有ければ、米、ヤ、貴様何しや、ハア、手の
 筋見る人か、コレ茶、一つ汲で下あれ、おちや、めつそふな、あな
 た方は、大事のお客、米、何じや、客じや、米代も拂はずに、あんな
 けない人取り込んで、まだ米やを街のじやの、コレ喰ひつ
 ぶし達、をれが喚くが無理か、此書出し、ソレ見やじやれ、大、ごん

を、かく詠る、尤此
 方大に多し、物氣な
 語大に多し、物氣な
 いの、物氣な
 ○色の紙の形に似た
 るなり、色紙に似た
 ○五つ文字、歌の
 初句の事をいふ、歌
 せては、歌と見出し
 の文を、歌と見出し
 三十一字に、よむ
 〇書出し、以下書
 の出で、文を、公家
 色紙の形に、よみ
 此も和歌に、よみ
 〇付るなり、合はし
 たるなり、合はし
 〇利は、中より、執
 中心より、執
 〇金、利、執
 の、利、執
 〇如、利、執
 〇細、利、執
 〇呼ぶ、利、執
 〇〇〇呼ぶ、利、執

、さりとは、もち
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

「よ、此切紙は色紙の形扱は歌か」とつくく、眺め、大いハテ
 珍らしき五つ文字書出し、一つ米代六十六つ、去年の霜月
 残る銀、是は戀歌とも思はれず、米ヤ、イヤ、戀も戀借銀乞じや、大いん
 「何にもせよ下く」には優しくも、三十一字をつらねしな
 エ、三十や四十の端九錢じや無いわいの、貴様もかゝり人
 なら、よう聞かしやれ、爰の芝六は盗人じや、かういふが無
 念なら、サア金拂へ、かうは云ふ物のコレ噂、おこなさんの心次
 第で、ア、結構な了簡が有に、サア薄い芝六に、百日近ふ仕送つ
 たは、じやりから付け入て、貴様のじやり塔、どふから念か
 けて居るに、じやりとては、胸欲な、留主が定ならコレどふぞ
 とひつたり抱付けば、ア、は何さじやんす、主が内に居や
 しやんす、ア、ア、内、内に居るなら銀受取うわい、ア、イエ
 留主じやわいな、米ヤ、留主ならちよつと、又取り付く、首筋

摺んで板間にどつさり、悔りしなから、負ぬ顔、米ヤ、芝六夫
 れ程内に居ながら、よう留主つかふな、サア米代受け取るか
 い、米ヤ、米代は渡して有り、ソイヤ、いつ渡した、米ヤ、密夫の
 代三百目の内で、六十六引、跡が二百三十四、こつち
 へ、今請け取る、米ヤ、ア、夫は、サア今渡せ、ア、と詰かけら
 れ、ぎつちり詰つた入口、びつじやり、門からしめて、米ヤ、留守
 じや、密夫代も米代も逢さへせねば、取りやりなし、留主は
 五分く、算用濟だ、とお留主に成た腰の骨、ちがく、引ず
 り逃げ、歸る姿は、地下に落ながら、心の官位、右近衛の中將
 淡海公、するく、と立ち出で、兼秋卿、政常卿、君にも益々
 叡慮め、たく御渡り、是といふも、芝六夫婦が、深切虎の口
 の御難を、遁れ、此家に匿し奉れども、計らざる入鹿が、亂帝
 の御耳に達しては、彌よ御惱も、重らんと、何事も、包み隠し、

妹春山婦女庭訓

庭樹なりしを其
 内庭なりしを其
 庭樹なりしを其
 内庭なりしを其
 庭樹なりしを其
 内庭なりしを其
 庭樹なりしを其
 内庭なりしを其
 庭樹なりしを其
 内庭なりしを其

あや、羅はうすも
 の類、羅はうすも
 の類、羅はうすも
 の類、羅はうすも
 の類、羅はうすも
 の類、羅はうすも
 の類、羅はうすも
 の類、羅はうすも
 の類、羅はうすも
 の類、羅はうすも

すは常住事と云ひ紛らしてもどこやらが鹿子まだらの
 雪見酒氣が築山で一盃せうかゝ爛つきやと女夫中酔た
 顔でも濟めやらぬ癪を押へて入りけり、村の歩人が表
 からあるとコレ興福寺の塔頭から鹿殺しの科人、獵師中間
 に極つた友吟味して訴人したら御褒美を下さるゝとお
 觸が廻つた庄屋殿迄早でざれと云捨て歸る高聲は、小耳
 にはつと三作が若と、様の身の上詮議かゝらばどふ
 せうと、稚な心のやさしくも眞實案じ詫住みの、手習文庫
 やれ双紙筆くびしめし何やらん、七ついろはの清書文章
 かき捜しやのわんぱく弟、コレ兄様、さつきの箱下されや
 くれぬとコリヤかうじやと引たくる、筆のしん身は憎から
 す、三作、夫れもやらふがコレ杉松、兄が頼む事聞いてたもる
 か、此状を持ての、太義ながら興福寺の門を擲て、寺中へ差

上げますといふて、渡して来てたも杉松、そしたら何ぞ賃
 下さるか三作やるともく、賃には春日野の火打焼買てや
 ろ、又嘘欺すのじやないかや三作、イヤくほんまじや杉松、そん
 なら合點じや、往て來ふとすかさるゝのも、偽寄のも、年よ
 り賢き杉松が、状懐にちよかく、走り見送る兄が書殘す
 筆の命毛器用なが、仇と白地の神ならぬ、折りもころ有れ
 ひそくと、表に窺ふ捕手の侍ソレとかけ聲かけ入て、かけ
 行く奥よりかけ出る芝六、待たぐ、こりや人の内へ理
 不盡に、狼籍千万、聞いたお前方は鹿奉行の御手下じや
 な、イヤ、此家の内に吟味有て、入鹿大王より詮議の役人、儕
 が内に匿まい置た者有るべし、眞直に白状と嵩にかゝれ
 どびくどもせず、ハ、何の事かと思ふたら、私じやとて、貧
 乏な狩人でも、相應のかくまいは致さいでは、それを御吟

○ちよかく走り
 ○筆の命毛 筆の
 中心の毛なり、其
 を三作が一命に譬
 へし詞か一命に譬
 ○仇の白地のかけし
 詞、八舞大王 入鹿
 か舞中に入りて、
 王と稱する事、
 ○相鷹のかくまひ
 此かくまひは鷹
 著の事をいへるな
 ○げうさん 仰山
 さかく事もあれど
 當れりとも見えず
 京の詞に事々しき
 を云ふなり
 ○胸にさし當る
 劍の胸に當るをさ
 したりと云る
 ○大庄屋 村々に
 庄屋あり、其庄屋
 の上は大庄屋あり
 ○毒蛇の口 災厄
 の迫るを云ふ譬へ
 なり
 ○局々 供奉の女
 官中にて、重もな
 る人なり、元來
 ○はだされ 馬の
 走りかぬる爲にす

る器にて人の他
 の事に引かれて志
 を挽しより出たる
 語なり、然有る
 ○さる事 然有る
 約の語なり、然有る
 有るの語なり、然有る
 ○明さくちさは云
 々、問答は今符と
 か、問答は今符と
 ○草記 源平
 盛衰に、草記、木
 我大君の國なれ
 はいつくか鬼の住
 家なるへきとある
 をとれるなり、云々
 ○心ゆるさぬ云々
 關と名け、又破
 れる縁も戸より來
 れる縁も戸より來
 反古にせよと云ひ
 集めたる挿し集に
 乗なすべしと云ひ
 挽なすべしと云ひ
 ○衆徒 寺中に住
 するも、又他所に住
 住するも、又他所に住
 衆徒とよび、與福
 寺に屬する僧、又俗
 もよべるなり、
 ○魂はかすがの
 遣はしめ鹿島神
 の白鹿に乗りて常

合ひ紙書きあつめたる胸の中母の心を三作も、俱に案す
 る折からに、奥福寺殺徒鹿役人、先に立ちたる杉松が、しる
 しの門口指し覗き役人、科人はあの物よな、捕たといふや
 否應言さず、三作を取て引立て、用意の早繩、お雉驚き、
 「コレ、何事、大事の子をどうするのじや、鹿は春日のつ
 かはしめ、殺した者は古へより、大垣の刑に行ふ大法、
 「エ、イ、其御詮議は聞けたが、狩人も多い中、外の吟味は成さ
 れいで、此子一人が知つた様に、あんまりな當推、但し證據
 でもござりまするか、役人、ハテ證據なくて名をさふか、其物
 爲といふ事、慥かな訴人、有て明白、其訴人したは何
 斯のやつじや、覚えもない無實をいふやつ、切刻んでも飽
 足らぬ、其訴人め、サア爰へ出して、お見せなされ、訴人は
 此物、現在の弟が注進、よもや相違は有まい」と聞て、恠り

「コレくぼん、吾儕はさつきにから、何所へ往て居やつた杉松
 「アイわじや此状もつて、あの坊様の内へ往て、連れ立つて戻
 つた」といふに、怪しと引つ取つて、讀度々に胸どきく
 「何しや、お尋ねの鹿を殺し候者は、私兄の三作に違ひござ
 なく候、そんなら此書付けを、わしが持て往た、サア兄様
 賃下され、饅頭ほしい、どぐはんせなき、エ、何いふのじ
 や、どつともふ性もない子供のいふ事取り上げて下さり
 ますな、ノウ、三作、何のそなたが其様な、法度を破つてたまる
 物か、サアちやつと云譯しやいの」とつき出せば、顔ふり上げ
 三作、いかにも弟か、訴人の通り、鹿殺しは私でござります、
 「コレくく、うなたは氣が上つたか、狼狽所じやないや、三作
 「イ、ヤ、狼狽はしませぬ、わしが手にした事、覚えのない狩人
 の、中間の袂に吟味がかり、ひよつとどうした人違で、ど

給ふと春日に注り
 の寺の縁起にあり
 ○當て推 無證據
 するに其人と疑念
 ○坊様 出家の居
 るに本に於て云
 直ちに坊様といふ
 事なりしなり云
 屋敷を御屋敷とい
 ○類はなき 我心
 此事は煩なり
 辨別する能はざる
 程の如年の義なる
 へし
 ○尋常 よの本に
 の意なるが本にて
 従容と云ふ意に云
 ひなれしなり云
 ○仕置は所刑と云
 京の町 此時の
 京は奈良をさして
 云なるへし
 ○立派 筋目の判
 然と立ちたる事に
 たり 美なるとの義
 たり
 ○止め様もなく云々
 ひもなきとの詞
 をないしやくり
 の詞にて無いと聞
 せしなり
 ○發明は恰例の義

六十四
 様の難義にならうもしれぬ、それが悲しき尋常の名乗
 て出ます、常々お前の咄したも、今のどく様は義理の有る
 親じや程に、猶太切に孝行にせいとソレ云しやたを、わしや
 よう覚えて居ますわいの、わしが仕置に合た跡で、どく様
 の泣しやれぬ様に、京の町へ奉公にやつたと、云ふて置ひ
 て下され是からは杉松を、わしと二人前可愛かつてや、鹿
 や兎の命を取れば、どうで未はかう成る物、責めてあれ一
 人は狩人として下さるな、そればつかりを頼みます、さら
 ばでござるか、様と親の代りに罪科を、引受ける氣の立
 派さを、思ひ合せて、ハアはつと、今更未練なとめ様も、あらが
 いやうもないじやくり扱もく、健氣などいはうか、産
 だ子ながら耻かしい、義理ある後の親夫、わしやまだ恩を
 得送らぬに、傳人も及ばぬ發明は、一生の智恵も、壽命も、十

○ひけらかす 自
 負する事
 ○前世の約束 此
 世の幸福は前世の
 善を行ひし報い
 此世の災厄は前世
 の悪を行ひし報い
 禍福吉凶皆前世よ
 りの約束なりと云
 りにて佛家の説な
 り
 ○成敗極る 罪科
 によりて所刑の定
 まりしとの義
 ○取り付く島も云
 母の身を舟につ
 け、母の舟を舟に
 立、其島を三作へ
 立、其島を三作へ
 立、其島を三作へ
 立、其島を三作へ

三年につゞめたか、こんな子を持つた親と、ひけらかした
 い稀な子を、世にも稀なる大垣の土の中へ生ながら、石で
 詰で殺すとは、なんぼ前世の約束でも、餘りむむい約束を
 と、イヤくくなんぼふでも殺さぬくく」と我子に、いつか
 としがみ付き、涙の瀧に、しめるに、ういどくくひ入る縛り
 縄、ヤア成敗極る科人に、返らぬ繰言、今宵の中は、寺中の法
 事、明六つの鐘つくを、相圖に、山本の土中を掘て、石で詰の
 刑罰、最早七つもう一時刻、限移ると引立る、なうどうよく
 ないは、畜生一疋を、殺した科を、それ程の、御成敗にも及
 ぶまい、御出家のお慈悲には、どうぞ助けて下さりませ、叶
 はぬ事なら土の中、母もいつしよに埋んで、取り付く島
 も、袂の岸、涙に漂ふうかれ船、繩目の綱は、親子の別れ、見返
 る姿、霧霞み、飛ぶが如くに引立て行く、母は正体腰も、ぬけ

妹背山婦女庭訓

○冥加 冥はくち
儀にて神の守りと
云ふが如し

○秦の益勝 秦氏
も出て古姓なり
又用明天皇の時
に秦川と云へる
人あれば、其等
思ひて此名を設け
しなるへし

○餅を呑む 若し
かひ其たしき
なり

○神事の冠 小忌
衣の神事の冠は
其製は白布を粉
に染めて、故に
小忌の冠也、故に
鳥の冠也、故に
鳥の冠也、故に

ある也、此時鎌足
公大切なる所給ひ
れば此服を着給ひ
しとなり

○心葉の冠 小忌
を著る時の冠は
心葉の冠也、故に
心葉の冠也、故に
心葉の冠也、故に
心葉の冠也、故に
心葉の冠也、故に
心葉の冠也、故に

○野の箱明けて
箱を明ける云へる
か、夜の明けてと
かけし詞なり

質に心迷ひ彌もつてお疑ひを重ねたれば、天子も爰には
置き給はし、冥加に叶ひ、一天の君を匿ひ申す身の大慶も
水の泡、勘當御免もなき時は、生ても死でも返らぬ心外、
身を切つても、他言致さぬ魂を、今改めて御覽に入る、コリヤ女
房、張詰た太郎が義心、大事の心底見せ損なふたは、三作と
いふろなたの連子、元は秦の益勝と云樂官の女房、蝦夷の
讒にて潰れた家、力に成て下されと、頼れての後連、義理の
有る子がかせに成て、鎌足公に根性を見下られたが口惜
さに指殺したは二人が中に、出生した此杉松、科はなけれ
ど主人へ面晴、鬼になつてと酔た顔、酒ではなうて、劍を呑
む、侍の義理が敵じやと、思ひ諦らめ坊主がかはり、に隨分
兄を可愛かつてやりやいのと、どうと座して泣きければ、
おまじノウコレを、れ程に思ふて下さる、其兄の三作は、鹿殺しの

科人になつて、纏られて行たはいな、ヤアくくく、すりや
おれが科を身に引受て、名乗て往たか、エ、うれ殺してはと
狂氣の如く、かけ出す弓手の岩壁に、鎌足太郎暫しと聲有て、
内大臣鎌足公、神事の禮服、小忌衣、心葉の冠、梅か香の、勾ひ
残れる采女の御方、手に捧げたる内侍所、悠然と出で給ひ
鎌足上太郎、心底慥に見届けたり、我敵の亂をさけ、よそな
がら守護する天子、一日にても、其方が、御難をさけしは、適
れ忠義、入鹿が心を懸けたる采女、久我之助に言含め、猿澤
の池に入水として、此興福寺の山奥に、鎌足諸共、隠れ住み、
今日圖らず、汝が、大垣の刑に行ふ所、不思議に命助かつ
たり、三作參れと仰の下、上下改めしつくと、携へ持ちし
寶の箱、明けて、我子の無事な顔、オ、ヤア、まだ生きて居て、
れたかと思ひ、がけなき夫婦が悦び、鎌足オ、不審尤、天皇御惱

○天の岩戸の古例を引き、天照太神に祈誓を
 かけ、百日の行滿する今日、争ひがたき神の力、刑罰の地に
 堀穿つ、土中に怪しき光り物能を見れば、先年失させ給ひ
 たる内侍所神璽の御箱、入鹿が父蝦夷大臣、とくより謀叛
 の根ざしにて、埋め隠せし二九色の寶、顯れ出しは是正に、
 神明の助け給ふ三作が命、今改めて鎌足が三代の忠臣、然
 ながら、鹿を殺せし春日の掟、同じ血脉の弟が死骸を埋め、
 刑罰の表を立て、菩提の爲め、印の石の其上に、撞鐘一字は
 鎌足が改めて建立せんと、仰せは今に曉の六つに死たる
 七つ子の數を合して十三鐘の音にぞ哀れ残りける、鎌足
 重て此八咫の御鏡は、天照す御神の御影を寫せし御正
 體、勿体なくも蝦夷大臣、穢れし土中に埋め置く、其故にこ
 う一天の御影を曇せ、御目しひさせ給ひしも、日月の鏡曇

りし故、我行法のけふに當つて、御鏡出させ給ふ事、常闇の
 世の岩戸を開き、天照神と天皇の御對面の時至れり、出御
 ぞうと奏聞の聲に應じて、淡海公、御手を取つて立出る、折
 から向ふ鏡の光り、朝日の影に暈きて、忽ち御目も明らか
 かに、采女ナウなつかしの帝様、采女是に」と走り寄り、互にゆかし
 き物語、御戀中も恐れ有り、采女ヤア、く太郎、汝が射たる爪黒の
 鹿は、入鹿が調伏にて、やがて太平萬乗の御代治し召す暫
 くも、民間に落給ひしは、天より地中に落給ふ、是を稀なる
 天智帝御目も將に秋の田の、荳穂の庵の假御殿、木の丸殿
 に、准らへて、けふ出陣の城廓に、惡魔追伏興福寺は、我藤原
 の氏の寺、いさや、是より臨幸と、先をばらつて、鎌足の威風
 りんく、綸言の汗、か涙の露にぬれ、草葉に置く芝六が、妻
 戀ふ雉子や子故の闇、明けてもくらき六つ七つ、十一十二

きなり、
○御眼もまきに云
秋にかけし詞なり
○新穂の冠は秋の云々
を新穂の冠に似せし
假御殿の冠に似せし
新穂の冠と置きし
○木の九殿 天智
天皇の御時
天皇の御時
皇國より日本へ
開國より日本へ
前國に行幸あり
天智天皇の御時
ありて、御時
の九殿に御時
事を取りて此の
福寺をもち、其
准せし木の時
は、此の時
館を以て、御
せし名なり、故
の古者運り、引
る作者の思ひや
○藤原の氏の寺
興福寺は淡海の
創立にて、海公の
原氏に必す此寺を
香の氏とす、故に
原の氏とす、故に

十三鐘の古跡を今に傳へける。

○第三

奈良の都の八重九重禁裏守護の太宰の館入鹿公のお成
とてさゝめき渡る奥女中荒牧彌藤次一間を出朝コリヤ仕
丁ども、今日は入鹿公御目出たの御悦びに、奈良の町へ入
込の諸職人商人藝者に受領を下されんとの勅諭相詰め
たる町人ども、一人づゝ呼出せはつと答へて立ち出る縣
めしかや諸人に司をたびてろれくに、國名を付し烏帽
子子の始めにかけし烏帽子やが身を立烏帽子兩眉は、三
大臣の御召とて、高き位やかけゑぼし、十二の冠式法の、ゑ
ぼしやなれば平七を、頭平と受領なされける跡へ出でた
はゑぼしに白丁彌藤次吃と見彌藤次、フウ其方は神職な神職

氏寺は古くより云
物事に、宗盛等か
叙山を、延曆寺を
と爲て、延曆寺を
平家の氏寺にせん
と云ひ、送りし事
出たり、延曆寺を
○殿風塵々 倫旨
へかけし詞の役
○祭四守護の役
古は有る事なし、
常朝の武官有る故也
頼朝の子孫代々三位
守と云る、後任に任
後世の体を摸せし
○藤原の諸事ある
京の事に、今東
は別なり、云ふ藤
○受領の國の守以
下何の介何の大
守何の介何の大
など、名何の云
よ、
日朝延にて行はる
公事なり、諸國
の公事なり、諸國
任せらる、事なれ
は、此受領を賜は
るが、これに似たり
○司をたびて 賜
ひてなり、上人の
○烏帽子 上人の
元服する時、名

ならば、なぜ吉田へ參て受領を受けぬ、自イヤ拙者めは鹿島
の事觸れ、當年は辛卯の年、崇年とござつて、鹿島の御寶
殿より、でつかちない光り物が飛出て、神の扉が八文字に
披け、神馬の四足に、大汗をかいてござる、彌宜神主是を歎
き、御湯を捧げて七座の齋時にお鹿島の御詫宣に、氏子ど
もが下用櫃に、しやりを切してむらつきをするで有ると、
人の物でも手廻り次第、打殺して其日を凌げ、むくりこく
り地の底より潤ほはして、米は下直に錢は高うさしてや
るとの御詫宣でござる、無上禮法新兵衛嘉兵衛祓へ給へ
清めて給ふとしゃべりける、彌藤次、さては汝事觸よな、向後ろ
ちが受領には、口松の差出の頭佐半次とゆるせし跡へぼ
つとしよ、髪いはねど手足黒々と、鍛冶やの木槌の扱てん
からり、ころりてんくからりの相槌に、打つや打ち物元が

るも此所の事也、
す固く執て争ふ事
なり、

○略相かへて面
色を現じてなり
○和睦 中直りの
事也

違ひはせしとすれば天皇采女は、兩家の中に隠し置かん
も知れざる故、大判事が詮議を申付けた、定高「コリヤそちに
も此疑ひはかゝるぞよ」是は又君の勅諭とも覺はませぬ
夫小貳より中惡き大判事殿、何故申合さう様もなし、私
にまでお疑ひは、恐れながら入敷いふな女め、と程音信不通の
中なるに、大判事が悴久我之助、うちが娘雛鳥と、密通致し
居るはいかに、イヤ知るまじと思ふが、悴どもが縁に繋かれ
たる汝なれば、兩方ともに吟味はのがれぬ、何と肝に答や
うが」とあく迄邪智の一言に、何思ひけん大判事、席を蹴立
行かんとす、透さず定高が刀の鑑むんづと取り、コレ待ち
給へ清澄殿、屹相かへて「コリヤ何處へ」大判事「何處へとは、親が
不和なる中を存じながら、忍び逢ふ悴が不所存、引捕へて吟
味せねば、子供の縁を幸に和睦せしといはれては、我家の

○さみせられ、嘲
けらるゝなり、

○尾箱 失敗と云
ふに同じ、

○弓箭神 武士を
守る神を云ふ、多
く八幡宮を申す事
なり、
○金打 劍と劍と
を打合せて偽り無
き契約をする事な
り、

○面晴れ 偽り無
き由を顯す事にて

恥辱となる、オ、うりや此方も同じ事、一旦は武士の意
地、今更中が直りたい計りに、娘にわざと不義させしと、世
上の人にさみせられては、過き行き給ふ夫へ立たぬ、わら
はも俱にと裾引上げ、かけ出す二人をはつたとねめ入敷、私
の趣意に立騒ぐ尾籠やつ、儕らが悴の不義を吟味はせぬ、
唇が尋るは采女が有家、サア何れからなりと早くいへ、何と
く「大判事、イヤ悴が性根はいさしらす、采女殿の義は且て存
せず、我詞に偽り有らば、弓箭神の御罰を請はんと、刀すら
りと抜放し、丁々と金打し、大判事「此上にも御疑有らば、いか程
の拷問なりとも、サア遊ばせ」とどつかと座す、オ、わらは
とても小貳が妻、家にかへて采女殿は匿まはぬ、水責火責
に逢とても、知らぬ事は存じませぬ」と詞するどに、いひ放
す入敷、然らば采女が詮議は追つて、先汝らが面晴なれば、

俗に明りを立てるべし
云ふ事に當るべし
○潔白 清き心を
見するとの義

○欄 欄干にて俗
にいふ手摺りなり
○心も共に 此欄
の花と共にの義な
り
○百里照の眼鏡
遠目鏡なるべし
○香具山 大和國
にありて國なかな
る山にて差したる
高山に非ず

○茶の趙高 趙高は秦の宦者にして、
始皇帝の寵を蒙り、
○趙高の眼 趙高の眼は、
○香具山 大和國にありて、
○百里照の眼鏡 遠目鏡なるべし、
○心も共に 此欄の花と共にの義なり、
○欄 欄干にて俗にいふ手摺りなり、
○潔白 清き心を見するとの義、
俗に明りを立てるべし、
云ふ事に當るべし、
○南都 平安京より南にありて、
○大和の地 大和國の地、
○安土 安土の地、
○文次 文次の名、
○宗秀 宗秀の名、
○當麻 當麻の名、
○希代 希代の名、
○名馬 名馬の名、
○吉野の牧 吉野の牧、
○狩出 狩出の事、
○其馬 其馬の事、
○引け 引けの事、
○廣庭 廣庭の事、
○引き出させ欄よりひらりと打乗り、
○名馬の勇み手綱かいぐりしとくく、
○響の音はりんくく、
○論言誰か背く

匿まはぬといふ潔白に、定高は雛鳥を入内させよ、又大判事も、覺けなきに相違なくば、久我之助を今日より、朕が目通りへ出勤させよ、急度其旨心得よ」と何かな探る當座の難題、二人は胸にきつくりと、答へも暫しなかりしが、稍有つて詞を揃へ、「斯有難き勅諭を、互の子供が違背致さば入鹿、オ、いふにや及ぶ」と傍りなる、生け置く櫻の一枝追取り入鹿得心すれば、榮ゆる花背くにおいて、は忽に、唇が威勢の嵐に當り、まづ此通り」と欄には、つしと打折り落花微塵はつと計りに親々の心も共に散亂せり、猶もゆるまぬ大音上げ入鹿、ヤア、彌藤次早く參れ、汝は百里照の目鏡を以て、香具山の絶頭より、急度遠見を仕れ、コリヤ、く兩人よく聞け、もし、少しでも用捨致さば、兩家は没收、從類までも絶するぞ、性根を定め、早行け」とせき立つ、詭意に親々の思ひは千々の

胸の中、見せぬ表に忠と義を、はり詰し氣のたゆみなく、打ち連れてこそ出て行く、誠に秦の趙高が、馬と欺く小男鹿の、入鹿が威勢を類ひなきか、る所へ中門より、追々驅入に、武智郡司安彦、先帝に味方をして、大鳥の城に籠りしを、官軍残らず馳せ向ひ、敵を攻付、晝夜に落城、大和に安曇の文次宗秀、當麻の邊に陣を取り、南都を攻る、其結構馳向ふて戦ひしに、味方の官軍利を失ひ、残らぬ敗北仕る」と息つきあへず言上すれば、入鹿ハ、ハ、物數ならぬ逆徒のやつばら、朕馳せ向ふて微塵にせんや、彼の穆王が龍馬に勝れし希代の名馬、吉野の牧より狩出したる、其馬引け」と廣庭へ引き出させ欄よりひらりと打乗り、名馬の勇み手綱かいぐりしとくく、響の音はりんくく、論言誰か背く

○瀬路 磯瀬を踏
りて案内を試るな
り
○紀州浦へ云々
吉野川は紀伊へ入
りて紀州郡と云ひ
同國伊那郡那賀郡
を御伊那郡へ出
る流急なり
○一てきは一時
にと云ふか如し

○岩橋の云々
昔は葛城山にあり
此は仙人の神に
此は仙人の神に
此は仙人の神に
此は仙人の神に
此は仙人の神に
此は仙人の神に
此は仙人の神に
此は仙人の神に
此は仙人の神に
此は仙人の神に

○鹿の巻筆 春日
の名産にて同境内
に取出しは多し
○小石は 假に
名遣ひなり
○流瀧つ 水の急
ふに流れて瀧るを云
○松浦佐用姫 祝
前國松浦にて用
姫と云ふ人にて唐
へ行くを懸手彦の男
死したるに石にて古
事なり

道理でござります、ほんにひよんな色事で、隣同士の紀伊國、大和御領分のせり合で、お二人の親御様はすれ、鳥様と久我様の妹脊の中を引き分ける、妹山脊山船も、御法度で、たつた此川一つい渡られさうな物、小菊瀬踏して見やらぬか、小莖オ、めつさうな、此谷川の逆落し、紀州浦へ一つてきに流れて往たら、鮫の餌食、したが申し雛鳥様、お前の病氣をお案じなされ、此假屋へ出養生、さしなさつたはよそながら、久我様にお前を逢す、後室様の粹なお捌き、女夫にして下さりませと、直にお願ひ遊ばしたら、よもやいやとは岩橋の渡る事こそならずとも、せめて遠目にお姿を、障子ぐはらりと縁端に、覗きこぼる、嬬ども、久我之助はうつくしく、父の行末身の上を守らせ給へど心中に、念悲観音の經机案じ入たる顔貌、手に取る様に、

あれ、机にもたれて久我之助様の物思はしいお顔持、お癪がな、發りつらんエ、お傍へ行きたい、コレ爰に居るわいな、どいへど招げど谷川の漲る音に紛れてや、聞はぬつらさ、雌エ、しんき、こちらが思ふ様にもない、コレこつちや向いて見たがよいとあせるお傍に氣の付々、侍女、ほんにそれよ、口でいはれぬ心のたけ、兼て認め奥山の鹿の巻筆封じ文、戀し小石にく、り添へ、女の念の通せよと、祈願をこめて打つ礫、からりと川に落瀧つ、波にせかれて流れ行く、雌エ、どんな心の念は届いても、女力の届かねば、思ふた計り片、便り返事を松浦佐用姫の石になりとも成たいと、ひれ伏山のかひもなき、久我之助川に目を付け、何處よりか水中に、打たる石は重けれど、逆巻水の勢ひに沈みもやらず流る、は、ア、重き君も入鹿といふ、逆臣の水の勢ひには、敵

箱島云へる歌の
ひんぎなり

○せん方もなく
かたし也泣くに
○空に知られぬ
内を打たれぬ

貫之の歌に「柳か
らで空に知られぬ
雪が降りけるか
○刀山何れか
○成山何れか
詩を採りて大判事
が如く身を削らる
上の花を歩むとい
云巧みにして妙な
○さだかにし儲か
なる後室の名にか
○けしちかか
○打掛るに
○互によふ詞にて
○今云ふは式と
○下りて顔を少し
○川向ひの喧嘩は
○落去り合ふ聲の
○落去りし結果の
○持通し心針を
○持通し心針を
○持通し心針を

當受るとも、わしや御前の女房じや、とても叶はぬ浮世なら、
法度を破つて此川の早瀬の波も厭ふまじ、何處いかなる方
へなど連れて退て下さんせ、私はうこへ行ます」と既に飛
び込む川岸に周章驚きどむる侍女「イヤく放しや」と泣入
る娘、久しヤレ短慮なり、雛鳥山川の此早瀬、水練を得たる者だ
に、渡り難きこの難所、忽命を失ふのみか、母後室に歎きを
かけ、我にも彌々憎しみかゝる科に科を重ねる道理、必早
まり召されな」と制する詞一とすちに、おもひ詰めたる女
氣も、今更よわる折こそ有れ、大判事清澄様御入なり」とし
らする聲はつと驚き久我之助、歸るを名残り押しどむる
も、我身を我身の儘ならず、コレなう待て」の聲計り、後室様
御出」と告る、下部に爲ん方もなく、庵の打菱れ、登る坂
さへ別れ路は、力難所を行く心地、空にしられぬ花曇り花

を歩めど、武士の心の嶮岨刀として、削るが如き物思ひ、思ひ
逢瀬の中を裂く川邊傳へに大判事清澄、こなたの岸より
太宰の後室、さだかにそれと道分の石と意地とを向ひ合
ふ、川を隔て、大判事様御役目御苦勞に存じます」と聲
うちかけをかいとりの夫の魂放さぬ式禮清澄も一揖し、大判事
「早かりし定高殿御前を下るも一時、参る所も一なれども、
此背山は身が領分、妹山は其許の御支配、川向ひの喧嘩と
やら、睨み合て日を送る此年月、心解るか解ぬかは、けふの
役目の落去次第、二つ一つの勅命、狼狽九捌きめさるな」と
胸くしやつく茨道、脇へかはして、仰のどほり、入鹿様の
御定意は、おたがひに子供の身の上、請け合ふては歸りな
がら、身腹は分ても心は別く、若あつと申さぬ時は、マアお前
にはどうせうと思し召す、大判事「知れた事、御前で承はつた通

妹脊山婦女庭訓

○身の内の腐り
は吾子を殺して家
名を全しするとの
誓への詞也

○入内 女御更立
などに成りて禁中
へ入るをいふ詞に
て、日々に内する
とは別なり
○枝ぶり 悪い 是
も前の腐りを殺し
て同じく子を斬り
て家名を立るの誓
なり

○吉左右は 吉報
の語なり

○瀬じし 愛を瀬
さなごし、大瀬に
同しく、大瀬の所
との性なり
○中吉野川 中好
しとかかる詞

○時だつ 角だつ
なり
○山と大和路 山
と山と大和路と
けし詞、大和路と
つ替らぬ詞、大和
の定紀をかねし詞
○明の家に知らぬ
母の名に知らぬ
野の東に知らぬ
中つに「をちのち
子に愛を知らぬ
安んじて母を呼ぶ
ふに響へし也、此呼

り、首打放すぶんの事さ、不所存の悴は有て益なく、無うて
事欠けず、身の中の腐は、殺で捨るが跡の養生畢竟親の子
のど名を付るは人間の私、天地から見ると時は同じ世界に
漏れた虫、別に不便とは存じ申さぬ、一ハテきつい思し切り、
私は又いかう了簡が違ひます、女子の未練な心からは、我
子が可愛うて成りませぬ、其かはりに、お前のお子息様の
事は眞實何とも存じませぬ、只大切なのはこちらの娘、忝ない
入鹿様のお聲のかゝつた身の幸、譬へどう申さうとも、母
が勧め入内させ、お后様と多くの人に、敬ひ傳かさうと思
へば、此様な嬉しい事はござりませぬ、ホ、ホ、と空笑ひ、大判事
「ふ、シテ又得心せぬ時はさだか、ハテうりやもう是非に及ばぬ、枝
ぶり悪い櫻木は、切て継木を致さねば、太宰の家が立ませ
ぬ、大判事、オ、そうなくては叶ふまい、此方の悴とても得心す

れば身の出世、榮花を咲す此一枝、川へ流すが知らせの返
答、盛りながらに流るゝは、吉左右、花を散して枝計り流る
ゝならば、悴か絶命と思はれよ、さだか、いかにも此方も此一枝、
娘の命生花を、散さぬ様に致しませう、大判事、オ、サ、今一時が互
の瀬でし、この國境は生死のさかひ、返答の善悪によつて、
遺恨に遺恨を重ねるか、さだか、サア是迄の意趣を流して、中吉
野川と落合ふか、大判事、まつそれまでは双方の領分、さだか、お捌を
待てをります、と、詞時つ親と親、山とやまと路分れても、替
らぬ紀の路、恩愛の胸は霞に埋もれし庵の内に別れ入る、
立派にいへば放しても、定かには知らぬ、子の心覺束なくも
呼子鳥、娘々と谷の戸に、音なふ初音、雛鳥も、母の機嫌をさ
し、足に、鼻様ようぞ、今日はお目出たう存じます、と、武家
の行儀の三つ指に、かたい程、猶親子のしたしみ、さだか、オ、よ

鳥は春の頃深山にて鳴く鳥なれば、此るに引きたるよ、く當りて妙なり、谷の戸に云々、然の谷の半に此住居を建てしなり、詞はたち有り、文也、つ三つ時、儀式を爲る時、三本を爲る付く様、爲る諸禮り式なり、上、獻上の、離へ獻上、新松の、交は、久我之介との間の事なる事を願ふ事なる、出しは、機會の、出かぬし、れ、結ひう、れ、に、係けし詞なり、

う飾りが出来ました、今日はうなたの顔持ちもよささうで、一入めでたい、母も祝ふて献上の、此花供へてたも、いづくに成つても、雛祭りは嬉しい物、女子ども何なりと、娘が氣に合ふ遊びをして、随分と勇めてくれ」といつに勝れし後室の、機嫌は訴訟のよい出しほ、侍女、今のをちやつと、乗りに出して御らうとせよと、嬪に、腰押されてもどやかくと、いひろ、くれのもつれ髪、イヤなう雛鳥脊たけ延た娘を、親の傍に引付て置は、結局病の種、うれで急に思案を極め、そなたによい殿御を持たず、嫁入さすが嬉しいか、嬪、エ、さたか、「ハテ氣遣ひ仕やんな、可愛娘の一生を任す夫、うなたの氣に入らぬ男を、何の母が持さうぞ、サア、嬪ども侍女、ハイ、くさやうでござります、御氣の通つた後室様嫁入の先は、大かた今の、ここがる、君でござりませう」と押し推當所も得手勝手、

○縁を組か係れる、○紅は、紐な、今、○色なるを胸の辛、○善なる箱は胸の善、○善なる箱は胸の善、

○一天の君、天子、○果報な、佛行、○報とは、前世の果、○報とは、前世の果、

誰にか縁を組紐に、胸は眞紅のふさがる箱、取り出し、さたか「妹脊をならぶる雛の日、は嫁入の吉日、此箱の主は極まる殿御雛の御膳で夫定め、コレをなたの夫といはは、誰有う入鹿大臣様じやわいの、」エ、うんならわたしを、嫁入さすと、は、さたか、オ、太宰の小貳が娘雛鳥美人の聞え、畝聞に達し、入内させよと有難い勅詔、嬪、エ、いはつと、恟りうろくと、詞は涙ぐむ計り、さたか、オ、肝が潰れる筈、夫と申も恐れ多い、一天の君を、蹺に取る家の面目、日本國に此上のない嫁入の随一果報な娘、此様な目出たい事が有物か、ナア、女子ども侍女、ハイ、くお目出たいと申さうか、いつを亂騒ぎでござります、」と工合違ひの嫁入に、菊も桔梗も投げ首の、二人は小腹立て行く、母の心も色々、咲き分けの枝差出し、親の赦さぬいひか、はし、徒は、何つて返らず、一旦思ひ初めた男、いつま

○此花は八重九重の心掬はぬ二つの花一つ枝に取り結び切放すに離されぬ悪縁の仇花今そなたの心次第で當時入鹿大臣の深山下風に吹散され久我之助は腹切ねばならぬや、雛鳥と縁を切つて入鹿様へ降参すれば清船も命を助る知らせは川へ流す櫻散るか散ぬか身の納り時に従がふ風に靡き君が手生けの花になれば八重も一重も恙なう九重の内に傳かるゝ互の幸ひ戀しと思ふ久我之助助けうと殺さふと今の返事のたつた一つ貞女の立様サアく見たいと戀も情も辨へて義理の柵せきとめても涙せき上げくながら母様段々聞譯ましたお詞は背きませぬさうなら得心して入内してたもるか雛鳥ア

○此花は八重九重の心掬はぬ二つの花一つ枝に取り結び切放すに離されぬ悪縁の仇花今そなたの心次第で當時入鹿大臣の深山下風に吹散され久我之助は腹切ねばならぬや、雛鳥と縁を切つて入鹿様へ降参すれば清船も命を助る知らせは川へ流す櫻散るか散ぬか身の納り時に従がふ風に靡き君が手生けの花になれば八重も一重も恙なう九重の内に傳かるゝ互の幸ひ戀しと思ふ久我之助助けうと殺さふと今の返事のたつた一つ貞女の立様サアく見たいと戀も情も辨へて義理の柵せきとめても涙せき上げくながら母様段々聞譯ましたお詞は背きませぬさうなら得心して入内してたもるか雛鳥ア

でも立通すが女の操破りやとはいはぬが貞女の立て様が有りさうな物とつくりとよう思案しや此花は八重一重互に不和なる親との心掬はぬ二つの花一つ枝に取り結び切放すに離されぬ悪縁の仇花今そなたの心次第で當時入鹿大臣の深山下風に吹散され久我之助は腹切ねばならぬや、雛鳥と縁を切つて入鹿様へ降参すれば清船も命を助る知らせは川へ流す櫻散るか散ぬか身の納り時に従がふ風に靡き君が手生けの花になれば八重も一重も恙なう九重の内に傳かるゝ互の幸ひ戀しと思ふ久我之助助けうと殺さふと今の返事のたつた一つ貞女の立様サアく見たいと戀も情も辨へて義理の柵せきとめても涙せき上げくながら母様段々聞譯ましたお詞は背きませぬさうなら得心して入内してたもるか雛鳥ア

イくさたかオ、嬉しや出かしやつたぐ、それでこそ貞女なれ、馴ぬ雲井の官仕へ武家の娘と笑はれなけふより内裏上藁の髪も改めすべらかし祝ふて母が結直してやりまじよといろく立ちちは立ちながら娘の心思ひやり別れの櫛のはかなさも解きほどかれぬ憂き思ひ重き背山の庵りの内父が前に謹んで久我之助が心底聞こし召し分けられ切腹御赦免下さる事身に取つていか計り大慶至極と手をつけば黙然たる大判事良打痺む目を開き大判事今朝入鹿大臣此大判事を召し出し先帝寵愛の采女身を投げたりとは偽り其方が倅久我之助人知らぬ方へ落としやりしに極れば必定汝らが方に匿まひ有べしとの難題元來知らぬ大判事能々思へば采女の御難をさけん爲め猿澤の池に入水の鉢にもてなして密に落ち参らせしは

て平人となりて斬
 りて父にも濁らさず
 りしとどなり
 りに非ず心打せし
 金打したる如く
 愛は實に金打へり
 の事は前に云
 ○心の金打
 恥辱とせし也
 物も仇とせし
 士なる也故に武
 に死すも切
 武士の死すも切
 武士の死すも切

○武士の表 武士
 は意強き主と
 する者なれは家
 の爲に子も死せし
 むるも意とせし
 心は外部のみに
 全に然らずにて
 内は然らずにて

中々久我之助が智慧でない、鎌足公の差圖を受けての計
 らひと、知たは身も今日が始め、親にも隠し包みしは、大事
 を洩さぬ心の金打若輩者には神妙の仕方、ハ、ア出かした
 りと思ふに付け、邪智深き入鹿、久我之助が降参せば、命を
 助ん連れ來れど、情の詞は釣り寄せて、拷問にかけん謀責
 殺さるゝ苦しみより、切腹さすれば、采女の詮議の根を斷
 つ大功、天下の主の御爲には、何卒の一人など、葎に生る草
 一本、引きぬくよりも、瑣細な事と、涙一滴こぼさぬは、武士
 の表、子の可愛ない者が、凡生有者に有るか、餘り健氣な子
 に耻て、親が介錯してくれる侍の綺羅を飾り、嚴めしく横
 たへし大小、忤が首を切る刀とは、五十年來知らざりしと
 老の悔に、清船も、親の慈悲、心有難涙、命二つ有ならば、君
 には死して忠義を立て、父には生て養育の御恩を送り申さ

○茨の絹の十二一
 俗語にて女の装束
 に此名ある事なし
 按ずるに五つ合た
 てる衣を五つ重ね
 る車あり、其に衣
 衣を装束したるを
 云なるべし、今雖
 鳥か心中には、内
 して此装束を着る
 とも茨の針ある物
 を着て身を刺さる
 う、如くとの装束
 也、茨の衣とはい

んに、今生の残念は一つと顔を見上げ見下して、わつとひ
 れ伏す親子の誠、こなたの亭には母後室、サア、目出た
 い、そなたの名の雛鳥を、其儘の内裏、雛装束の付け様も、此
 女雛と見合せて、サア、早く早うと有ければ、恨めしげに打ま
 もり、女夫一對いつまでも、添遂るころ雛の徳、思ふお人に
 引き離され、何樂みの女御后、茨の絹の十二一、重雛の姿も
 恨めしと取つて打付け、縁板にころりと落とし、女雛の首、驚
 く母の胸板に、必死と極る娘の命、包めどせき來るはらう、
 涙さか娘入内さすといふたは、偽り、先此様に首切つて、渡す
 のじやはいのう、エ、そんならほんぐに、貞女を立てさ
 して下さりますか、ア、忝けない有難いと、伏し拜む手を取
 つて、ナウ入内せず死るのを、夫程に嬉しが、娘の心知
 らいで成らうか、あつと受けても、自害して死ぬる覺悟は知

○成敗の極まる上け
時便なる事ある
玉の玉に玉の玉に
子玉の玉に玉の玉に
て玉の玉に玉の玉に
を玉の玉に玉の玉に
○無量品 曹洞の
は、人死すといへ

りながら、そなたの死ぬる事聞いたら、思ひ合ふた久我之助、
俱に自害召れうも知れぬ、せめて一人は助けたま、一旦得
心したにして、母が手づからといた髪は、下げ髪じやない、
成敗のかき上げ髪、介錯の支度じやわいの、高いも卑いも
姫ごぜの夫といふは、たつた一人、穢らはしい玉の興、何の
母も嬉しかろ、祝言こそせぬ、心計りは久我之助が、宿の妻
と思ふて死にや、エ、是程に思ふ中、一日半時添しもせず、さ
いの河原へやるかいの、と引き寄せく、雛鳥も、膝に取り
付き抱き付き、忝なさと嬉しさと逢ふて別る、名残りの
涙、一つに落る三つ瀬川、川を隔て清船が、最期観念、惡びれ
ず、焼刃直なる魂の、九寸五分取直し、腹にぐつと突き立て
る、大判事ヤレ、暫く引廻すな、覺悟の切腹せく事は、ない、コリヤ冥
途の血脉、讀さしの無量品、親が讀誦する間、一生の名残、女

○花は、みよし野
世の人は、花は三
吉野人は、武士と云
よ事あるを、待の手
本といふに、て聞か
せし、血の涙を、ちて
○血の涙を、ちて
大今集に、血の涙落
ちて、ちて、ちて、ちて
る、ちて、ちて、ちて、ちて

○無量品 曹洞の
は、人死すといへ

が面一目見て、なせ死なぬ、久我、イヤ存じも寄らぬ、此期に及ん
で左程狼狽た、未練の性根は、ござりませぬ、さりながら、今
はの際の御願ひ、私相果しと聞ば、義理に繋れ、雛鳥も、俱に
生害と申すべし、さ有る時は、太宰の家も、斷絶暫くの間な
がら、切腹の義はお隠しなされ、降参承知致せし、体、後室
方へお知せ有らば、女も得心仕り、入内致せば、彼が爲め不
義の汚名は受けられども、是ぞ色に迷はぬ、潔白、大判事オ、出
かした、能く気が付いた、年來立てぬく、武士の意地、不和な
中程義理深し、命を捨るは、天下の爲め、助けるは、又家の爲
め、氣遣ひせせと、最期を清う、花は三吉野侍の手本に、なれ
と、潔く、いへど心の亂れ、咲あたら、櫻の若者を、ちらす惜しさと
と不便さ、と小枝に、ろ、ぐ血の涙、落ちて、波間に、流れ行く、
夫とも知らず、悦ぶ、雛鳥、アレ、く花が流る、は、嬉しや久我

○冥途へ参ります千年も
○中を死して行く途
○未来の世に於て此來
の世を云ふ

○銷付く如くは愛
子と斬る如くは
私と斬る如くは
○難い血脈の離れぬと
難い血脈の離れぬと

○刀持つ手も大磐
石大磐石にて押
へらる如くは思
よとたり地獄の
○四苦八苦命もちりく日もち
○生八苦地獄の
○生八苦地獄の
○生八苦地獄の

前接世智生四
○苦の時に受ける
○如しとて受ける
○如しとて受ける
○如しとて受ける

様の御身に恙のないしるし私は冥途へ参ります千年も
万年も御無事で長生遊ばして未來で添ふて下さんせど
心でいふが暇乞思ひ置く事いひ置く事もう何れもござ
んせぬ片時も早うサアかゝ様切てく」と身を惜しまぬ我
子の覺悟に勵まされ胸を定めて取り上れど刀は鞘に錆
付く如く離れ兼たる血脈の継今切り殺す雛鳥を無事と
しらする返事の櫻同しく川に浮ぶれば久我ハア嬉しや是
ぞ雛鳥が入内のしらせ久我之助が心の安堵采女の方の
御有家は最前申し上る通り此世に心残りなし御苦勞な
がら御介錯サアく母様切つていの未練にござんす母
様と泣かぬ顔するいちらしさ刀持つ手も大磐石思ひは
同じ大判事子よりも親の四苦八苦命もちりく日もち
りく、さだかハアさうじや早西に入る日輪は娘がお迎ひ彌

陀の來迎西方淨土へ導き給へ南無阿彌陀佛と眼を閉ち
て思ひ切つたる首諸共わつと泣く聲答ゆる御肝に徹し
て大判事刀かちりと落たる障子大判事ヤア雛鳥が首討つた
かさだか久我殿は腹切つてかハアしなしたり」とどうと座し
悔むも泣くも一時に呆れて詞もなかりしが良有つて定
高聲を上げさだか入鹿大臣へ差し上る雛鳥が首御檢使受け
取り下されと呼はる聲を吹き送る風の案内に大判事歎
きの姿改めて衣紋繕ろひしづくどおり立つ川邊の柳
腰娘の首をかき抱きさだか大判事様わけては何れも申しま
せぬ御子息の御命はどうぞと思ふた甲斐もないあへな
い有様お前様のお心も推量致して居まする添子に添れ
ぬ惡縁を思ひ合ふたが互の因果此方の娘も添ひたいく
と思ひ死あまり不便に存じますせめて久我之助殿の息

妹香山婦女庭訓

○流し灌頂 此説
 種々有り 佛家
 要するに 佛也
 禱は清浄にして 施水
 施す所の地を 施水
 施す所の地を 施水
 施す所の地を 施水
 施す所の地を 施水
 施す所の地を 施水
 施す所の地を 施水

○水盃 凶儀の盃
 酒は水を用ふる禮
 なり
 ○娘の父母とを
 母と嫁の父母とを

有る中に、此首を其方へお渡し申すか娘を嫁入りさす心、
大判事「實尤嫁は大和智は紀伊國妹背の山の中に落る吉野の
 川の水盃櫻のはやしの大島臺目出たう祝言さしませう
 わいさだか」うれなら是迄の心も解けて大判事ハテ互あはれにあはれ同あはれ士あはれさだか
 「エ、忝ないと悦ぶも跡の祭り、ほんに背たけ延た者をいつ
 までも子供やうに思ふて暮すは親のならひあまやか
 した雛の道具、一人子を殺して何にせう、跡に置く程涙の
 種々共、其一式残らず川へ流し灌頂、未來へ送る嫁入り道
 具、行器、長持、犬張子、小袖、箆、命ながらへ居るな
 らば、一世一度の送り物、五町七丁、續く程美々敷せんと樂
 みに、思ふた事は引かへて、水に成たる水葬禮、大名の子の
 嫁入に、乗物さへも中く、に、記念も仇の爪、琴に、首取、載す
 る弘誓の船、あなたの方より彼岸に流る、血汐清船が、今

水に、是は嫁入は月
 成るに、是は嫁入は月
 成るに、是は嫁入は月
 成るに、是は嫁入は月
 成るに、是は嫁入は月
 成るに、是は嫁入は月
 成るに、是は嫁入は月
 成るに、是は嫁入は月

はの顔はせ見る親の口に祝言心の稱名、千秋萬歳の、千箱
 の玉の緒も切れて、今はあへなき此死顔、生きて居る中此
 やうに、智よ嫁よと云ならば、いか計り悦ばんに、領分の遺
 恨より、意地、意地を立通す、其上重なる入鹿の疑ひ、中直
 るにも、直られぬ義理に成たが二人が不運、あれ程思ひ結
 た嫁、何の入鹿に隨はうとも死なねばならぬ子供、一時
 に殺したは、未來で早う添してやりたさ、云ひ合はさねど
 後室にも、是まで不和な大判事を、姪と思し召はこそ、忤に
 立て、一人の娘、オ、よくころお手にかけられし、過分に存
 する定高殿、さだたか、勿躰なげない、其お禮はあちらこちら、ふつ
 かな娘故、大事のお子を御切腹、器量筋目も勝れた殿御、
 夫に持た果報者、とはいひながらあれ程まで、手しほにか
 けて育てた子を、又手に掛けて切る心、大判事ア、推量致して

○草葉の落りて、新井の物さしを、合す手と合せ、兼たるは、世の中、引いたり、オ、引たり、

○草葉の落りて、新井の物さしを、合す手と合せ、兼たるは、世の中、引いたり、オ、引たり、

○草葉の落りて、新井の物さしを、合す手と合せ、兼たるは、世の中、引いたり、オ、引たり、

る、武士の覺悟は常ながら、まさかの時は、取亂し、介錯仕
後れ面目ない、いえく、それで目出たい此祝言、是がほ
んの葬よ嫁入、一代一度の祝言に、智殿の無紋の上下、
首ばかりの嫁御寮に、對面せうとは、しらなんだ、それも子
供が遁れぬ壽命、どにもかくにも世の中の子といふ文字に
死の聲の、有も定まる宿業と、隔つる心親く、の積る思ひ
の山く、は、どけて流れて吉野川、いと、漲るばかり也、涙
はらふて大判事、首かき上げて、聲高く、惸清船承はれ、人
間最期一念によつて、輪廻の生を引とかや、忠義に死する
汝が魂魄、君父の影身に付き添ひて、朝敵退治の勝軍を、草
葉のかけより見物せよ、今雛鳥と改めて、親がゆるして、沈
未來、五百生迄かはらぬ夫婦、忠臣貞女の操を立て、死たる
ものと高聲に、閻魔の廳を名乗て通れ、なむ成佛得脱と、唱

ふる聲の聞えて、や、物得いはねど、合す手を、合せ兼たる此
世の別れ、早日も暮て人顔も、見えす庵りの霧隠れ、うづむ
娘の亡骸は、こなたの山にとゞまれど、首は脊山に、檢使の
役目、我子の介錯、涙の雛よ、しや世の中憂き事は、いつかた
いまの大和路や、跡に妹山、先たつ脊山、恩愛義理を、せき下
す、涙の川瀬、三吉野の花を見捨てて、出て、行く、

○第四

引いたり、オ、引たり、文月七日例年の、水を新井に操返
す、釣瓶の綱も三輪の里、酒商賣の世、杉屋が身過ぎの水の
内井戸を、わけて祝ひの賑は、しき人々、サア、く濟んだと、取々に、
御酒洗米供物、皆々汗を入れたける主の母は、納戸より運
ぶ用意の酒肴、いつにないほやく、機嫌、近所の衆、どな

世に味酒の三輪
者、思ひて酒屋の
事、作り敷りしな
り、世に此屋の
○世に此屋の世
て、此屋の世に
屋、此屋の世に
元、此屋の世に
山、此屋の世に
杉、此屋の世に
○術、此屋の世に
る、此屋の世に

○愛たてない、此
方、愛たてない、此
如、愛たてない、此

○ませた世界
世、ませた世界
世、ませた世界
世、ませた世界
世、ませた世界

○寺子や、家
昔、寺子や、家
昔、寺子や、家

○換撥じや、換
に、換撥じや、換
は、換撥じや、換

○男山、酒の
に、男山、酒の
を、男山、酒の

たも大義でござんした、嘉例の通り酒盛して、暮るまでゆ
つくりと、遊んで往んで下さんせ、コレ土佐衛門さん、年かさ
にお前から酒始めて下さんせ、ア、又雑作な、よしにさん
せ、いでおいらが相借屋で手傳ふのも、年中爰の井戸の水
をつかふ恩返し、なう五洲兵衛、うじやないか、五洲、オ、さう
ともく、氣を張つて貰つては術ない、是からはいつもの
通り、賑やかに遊びまじよ、サア野平、藤六、騒ごぞや、ホンニ
それはさうと、コレ上さん、見れば爰にも寺屋の様に、七夕様
が祭つて有るな、サアノマア見て下さんせ、愛たてないと思
はん、しよが、こちの娘のアイお三輪、何やら星様に願が有る
とて、あの様に内で祭るも色々の供物、ませた世界じやな
いかいな、五洲、ホ、うりやマア奇特な事ちや、うして此お娘は留
主かへ、サア少い時往た寺子やへ、七夕に呼れました、サア、

一つ呑で下さんせ、ヤイ子太郎、酌をしをらぬか、どりや吸物
に豆腐でも、焚て來まじよと母親は、納戸へ入れれば、打ちく
つろぎ廻る盃底な、しとも引受け、くいつき呑着の鉢を引
き寄せて、箸放さずのめつた喰、丁稚の子太郎、呆れ顔、子太郎
ア、扱、氣味のよいとは、換撥じや、よつ程下作な呑様じや、
井戸の鮒が水呑む様に、口開てがつぶく、エ、それでは味
が知れにくかる、コレ此酒は、かみ様が張り込で、こちの名酒
の第一番、男山といふ酒じやが、こな様達は本のむちや呑、
此銚子の替りめから、もう鬼殺しに爲てくれう、うしてマア
好い加減に、酒呑んしたら、いつもの通り騒でかい、こちの
お三輪様の三味線と、太鼓も借りて來て置いた、おつと合
點と口利の、土左衛門が、眉に皺、走られはさうじやが、此隣
りへ近頃來た、相借屋の鳥帽子折、此井戸がへにも立ち合

○なめた奴 無禮
り俗言に非ず

○唐のはめ 漢語
をいふ事語なるべし

○物云ひつけて
議論しての事語な

○借屋の内の云々
元來高家の婦人にて

○神様とは其を云々
云ふも本義にてて

○腰をも稱する事
なれり其方をかみに

○神様が人へり
は神が事なるをて

○上様は事なるを
ては尤も白しとせ

○辛きは辛若り云々
波に又るを云ひて

○辛きは辛若り云々
波に又るを云ひて

○辛きは辛若り云々
波に又るを云ひて

○辛きは辛若り云々
波に又るを云ひて

○辛きは辛若り云々
波に又るを云ひて

はす、あんまりなめた奴じやないか、野平何と思やるや野平
「ソレく、なま白けた顔付で、馬鹿慥慥な生れ付き、平生ぬか
す挨拶も、子細らしい切り口上、毛唐人のやうな奴、大方ッ
レ、今時はやる早學門といふ本を見て、唐のはめ句を爲居の
じや、此井戸がへに、出合はぬからは、急度物いひ付けてや
ろ」と借屋の内の神様達、御託宣も取々に、それともしらす
のつし、のし、歸る隣りの鳥帽子折、辛き世渡りあま口に、羊
羹色の黒小袖、一腰指た取りなりに、浪人どころ知られけ
れ、門口より腰かゞめ、隣家に居ります、齒原求女でござ
ります、お屋敷方の用事に付き、未明に罷出、只今歸宿仕る、
後室様には、彌御機嫌うるは、しうむりませう、後刻緩りと
御意得ませう」と我家へ入を皆々が、差や、これくく、マア
待たんせ、けふはコレ爰の井戸がへ、相借屋が寄つて居るの

○後室様 酒屋の
母を云ふ、一重の
合璧、壁一重の
隙より、求女の
詞未明、先格作法の
免な、詞と知人、教
か、し、又、年、學、問、云、々
とあり、し、此、詞、と
合せ、か、る、べし、

○いさこが 葛藤
○いた苦情等、さう
佃言なり

○此石で 石は石
磁の飛にて、磁石
をいふ事なるべし

に、こな様ばかり來ず、居て付合いが濟のかい、但しはお
いらを潰すのか」とねだりせり、ふに求女は、恠り、上り口に
兩手をつき、求女、是はく、お顔を見れば、皆合璧のお方、
是の井戸がへ、お手傳へ、曾て以て私存せず、これと申すも
不案内から、先捨の作法を存せず、段々の失禮、眞平御赦免
下され」と壁に額すり付け、る、土、これく、又子細らしい
事いはんす、か、いの、ハ、勝手を知らに、や、よとが、ない、了、簡
せいなら、夫で濟む、こつちも、一番いふた跡は、モウい、ご、ご
はない、わいの、此土左衛門が、呑み込んだく、然らば、あな
た様がお取なしで、かやうに御教訓なされた上は、其い、ご、ご
ざとやら申す、御遺恨は、ござりませぬ、か、土、サア、もう、善い、云
んすな、さて、おいらは、餘程酔て居る、是からは、嘉例の、慥、ご、ご
や、調子が、合、いで、面白、ない、此石で、き、ゆ、つと、やらん、せ、求女、ハ、

○新面 顔の新し
しきなり、知人
の海なり、兄ひ
○音頭 舞の頭
て拍子取る事
○千代 松坂の元祿の松坂の千代の子を
○頭 踊りなると世に流行せしるるを
○引 踊りなると世に流行せしるるを
○鳥帽子 鳥帽子の名なるを
○手 採むに云かけ
○御 召なするを
○の 名なるを
○に かけしるるを
○も 引立てしるるを
○が 踊りなると世に流行せしるるを
○ふ 所 踊りなると世に流行せしるるを
○は 風折るを云々
○の 心 折るを見合せ掛
○は 帆 かけたるはし
○は 帆 かけたるはし

百十六
添ふはござりますが、私一滴もたべませぬま、オットロした
ら勝手次第、サア是からが騒ぎの趣向、此土左衛門に烏帽子
や殿、五洲兵衛に丁稚の子太郎、しめて四人の大おどり、三
味線、太鼓は、野平、藤六、よいかく、求女様も合點か、スリヤ
私にも其踊を、オイノこな様は、此借屋での新面、猶踊にや
ならぬわい、音頭もおれが二役じやうた、ヤア千代の始めの一
と踊り、先は松坂こえた、松坂こえた、アツサ踊はありそく
ハツハヨイヤサゑぼしや殿はもじくくと、手持ち不沙汰に採み
烏帽子、ヤットサ、爰の娘の柳さびび引き立てゑほしと折りかけ
た、ヤットサ、風折るぼし見すまして、帆かけゑぼしと歸らる、
ヤットサ、家主もぎ兵衛息せきもど、いかにか嘉例の祝でも、あんな
り騒ぎが嵩高なと門口から聲高に、わめいてはいれどい
かな事、耳へも入らず、ヤットサ、ソレヤットサ、もぎ兵衛叶はずども

○と ほんさんと
○と ほんさんと
○と ほんさんと

○つ け く
○つ け く
○つ け く

百十七
く、に、呵、る、詞、も、拍、子、づ、き、ヤ、ッ、ト、サ、も、此、家、主、を、う、で、に、し、て、酒
を、呑、め、ど、も、い、へ、ば、こ、う、ヤ、ッ、ト、サ、儕、等、計、り、呑、喰、ひ、近、所、を、搆、は
ぬ、大、騒、ぎ、是、程、い、ふ、て、も、聞、入、に、や、家、明、付、る、が、合、點、か、オ、サ、テ
合、點、じ、や、是、を、來、て、見、よ、か、し、の、人、お、家、主、渡、し、た、と、踊、る、拍
子、の、醉、機、嫌、夢、中、に、成、て、立、歸、る、家、主、跡、に、ど、ほ、ん、と、成、り、も、さ
ア、や、く、た、い、も、無、い、奴、等、ど、う、く、お、れ、迄、夢、中、に、し、た、婆、様
内、に、か、逢、ひ、た、い、と、い、ふ、聲、聞、て、納、戸、よ、り、オ、是、は、マ、ア、お、家
主、様、か、ヤ、イ、子、太、郎、め、あ、な、た、が、お、出、成、さ、れ、た、ら、な、ぜ、お、れ、に
知、ら、せ、を、ら、ぬ、子、太、郎、ナ、ア、ニ、い、は、ん、す、や、ら、あ、の、お、家、主、様、も、今、ま
で、同、じ、様、に、踊、て、有、た、物、又、つ、け、く、と、何、云、を、る、サ、ア、く
申、し、なん、ぞ、御、用、で、ご、ざ、り、ま、す、か、オ、用、ど、も、く、大、事、の、用、
さ、る、お、侍、か、ら、頼、れ、た、が、入、鹿、様、の、云、付、で、ソ、レ、鎌、足、と、い、ふ、わ
ろ、の、息、子、の、淡、海、方、と、流、浪、し、て、居、け、な、そ、れ、を、見、付、出、し、た

○火も消して店し
めをかく老母の云
用するなり、火の
は市目にして、酒
買が来たら、酔つて
盗人と云ふ、酒
を見て、所なり、体
の意、終日

○やことなきは
止事無きとも、昔は
て、高貴の人とい
ふ事なり、火へ香
を焼きしめしなり
○衣かつき、衣を
取りて、而して、女
また女官等のせし
事なり、せし
○しほぶき、せき
ばちひの事なり、
○あるに、許いに
て何事に限らずに

ら大金、何でもマアこちへござれ、どつくりと云て聞かそ、サアち
やつとくくく、（註）ハイ、くく、うしたらお前へ参りまじよ、ヤイ
くく、子太郎よ、サア忙がしう成つて来た、もう日が暮れたを
うな、火も消して店明けい、用心に氣を付けい、又此娘は寺
屋から戻りが遅い、ソレ酒買が来たら、擲き出せ、盗人が来た
ら酒はかつてやりをれ」と氣のせく儘に間違ひだらけ、打
ち連れてこころ、出て行く、日と俱に、いとなむさまも入相の、
四方の市藏戸さし時、子太郎跡を打見やり、灯を上げ表の
戸夜の構へのそて爰と、こなたの道より、歩みよる振の袖
の香やひとなき面を隠す絹かつき、誰しら絹のやさ姿、窺
ふ内に隣の軒知らせの咳主の求女姿、今宵はどうして早
かりし、サアくこちへ」と其跡はいはず語らず手を取つて、戸
口立て寄せ入る跡に、子太郎は不審顔隣りの門口耳をあ

り、葎すと云へる如
き所に云へる、中内
にのみじと云ふ詞
によく當れるなり
○はし早い、好色
の敏なるをいふ俚
言なり、

○つおやくつお
く、と獨言する事
なり、

○求女の姿、百人
一首なるを、とめ
姿をもちりし詞な

て、聞すまとして立ち戻り、子太郎「なんでも隣のゑぼしめは、おれ
とは違ふて、よつ程にらしい色事仕じやわい、あいつが見事
なほぼしで、アノ代物しめをると聞けた、こちのお娘に聞せ
たら、大抵の事じや有るまい、エ、著早い奴では有る」とつぶ
やく所へ娘お三輪寺子やもどり足早や、門口はいれば
子太郎「やお三輪さん、戻らんしたか、サアく事じやくく、大事
じやくく、お、あの人はいの何じやいの、私に恠りさし
やつたわいの子太郎」としやつたわいの所かいの、コレお前に忠
義をいふて聞かす、忠義とは何の事じやいの、子太郎「エ、忠
義とは忠臣の事じやわいの、サ、其忠臣は知つて居るが
の、それが何ぞ爲たかや、サ、其忠臣は、ア、隣りのほぼしめ
がな、隣のえぼしとは、ム、求様の事かいの、オ、求女く、其
求の姿から起つた事、こちの上様は、家主殿へ用が有て、行

○けんさい 幻妻
とも書く 資を
も云へる事あれ
惣て女を誹りて
ふ詞の如し

かじやつた其跡へ何じやか知らぬが眞白な絹をかつぎ、
幽霊かと思ふたら美しいげんさいが隣の門口ごとく
と叩いたうしたら求様がすつと出て能う早う来たナアと、
手に手を取て内へはいつたそれからおれがじつとして
聞て居たらソレこちらへ雇ふ男どもが朝の間に酒桶洗ふ
様に、シイ〜といふ音がした、どうでもありや求様が、さゝら
べこすると見えるわいな、ナントお三輪様、コリヤだまつて居
られまいがナ、おれ、ム、うんなら何といやる、求様の所へ美し
い女中様が見にて、其女中様を連れ立つて、はいらしやん
したといやるのか、子太郎「アイ、おれ、うりやマア合點のいかぬ事幸
ひかゝ様も留主なれば、そなた行て求様を、爰へ連れて戻
つてたも子太郎「オット合點呑込んだ」と走り出て隣の門破る計
りに打たゝき子太郎「コレ求様隣りの酒やから使に來た、今の

○見えて 來るを
云ふ内詞なり

○印判持て 實印
持參で來れども也
子太郎か頭智にて
要用あるを示すか
戒は三輪と誓約
させんと深意も
有るべし

○あぢな墨付 常
に彫りし様子との
義なり

○兩人とも 子太
郎か賦言なり
○おぼこ 御坊子
の娘か幼兒を坊と
いふ、幼兒の如く
成長せし意なるべ

が濟んだら、印判持てござんせと、口から出次第求女は恟
り何やらんと立ち出れば、物をもいはず子太郎「マア〜こちへ
と無理やり、手を引き連れて我家の内、それと見るより
娘のお三輪口にはねど赤らむ顔、おれ「求様、お歸りなされ
たか、求、是は〜」お三輪様、寺屋へお出なさつたげな」と
互にあぢな墨付きを、子太郎がひつ取つて、子太郎「サアおれが
役はもう是まで、そこで何かの立て引きさんせ、爰らで我
ら粹を通し、夜食の扶持に有つかふ、兩人とも後に逢ふ」と
納戸へ走り入りける跡に二人はつきほなく、おぼこ育
ちの娘氣に思ひ詰めたる一筋を、いはふとすれば胸せま
りおれ「今子太郎に聞いたれば、美しくしい女中様が、宵からお
前へ來てしやけな、定めてそれは隠し妻、是までお前とわ
たしが中逢ふ事さへもたま〜に、千年も萬年も、かはら

○浮世の譯 世の道理も知らぬ世の
○いひかはし 言交すにて互に切約
せし事

○神子 巫をいふ
女にして神樂を行
ふ役なり
○影向 神佛の現
れ來るを云ふ

○和歌三神 住吉
熊島人丸をいふ

○緒環 手手巻に
て手を手にて巻
ける故の名なり

ぬ契りとおつしやつた其約束はいつわりか浮世の譯も
辨まへぬ在所育ちのわたしでも言ひ交した事念ればせ
ぬあんまりむごいと取り付いて涙先き立つ恨み言 是
は思もよらぬ疑ひ成程女中は來て居るがあれは春日の
神子殿其連れ合ひの禰宜殿の烏帽子を誂へに見はたの
じや美女はおろかいか天女が影向有ても外へちる心
は無い和歌三神を誓ひに懸け偽申さぬ」と時の間に合落
付せばさすがおぼこの解けやすく神様まで誓言にそれ
でわたしも落付いた必ず變つて下さんすな」と立ち上つ
て七夕に供へ祭りし二つの緒環持ち出て、前に置き、おまわ
「わたしが寺屋へ行た時にお師匠様に聞て置いた殿御の
心のかはらぬ様に星様を祈るには白い糸赤い糸緒手巻
に針を付け結び合せて祭るとやら、オ、それか則ち願ひ

○願ひの糸 願を
かゝる爲に供ふる
糸の時、此糸へ蜘蛛の
糸をかくると俗説
に云へり
○乞巧針 巧を乞
ふにて、裁縫の藝
を巧と云ひて其上
を乞ふを乞巧針と
いふ、昔は祭りに
也、乞巧針とある
の事につきて、又男女
は稀なるべし
○惚れる云々 此
見當らず

○星合 星逢ひに
て、二星の逢ふ夜
を云ふ
○緒手巻 千代の
探り交す緒手巻を
取り、此糸を求女お
りて此糸につけお
みわはる求女に糸を
つけて退行の道具を
につけて退行の道具を
の使ふべき爲の伏線
緒手巻の事は史に
見えたる里に女あ
りけるに、貴き男
夜々來りて夫婦の

の糸の乞巧針、おまわ、御前も能う知つてしやナ、白い糸は
殿御と定め、女子の方は赤い糸、それでわたしも此願ひでめ、
てら屋で見つた本の中に心をかけし女の歌、何とやら、オ、
うれよ戀渡る思ひはちぎに結ぼれて、幾夜願ひの糸の緒
手巻、オ、其男の返しには逢ひ見ての後も願ひの糸筋を、
ようへ亂すな君が緒手巻、おまわ、ア、くろうでござんした、い
つ迄も變らぬとせし、赤い糸をお前に渡し、白い糸を私が
持ち、契りもながき願ひの糸、夫婦の約束星合にかさゝぎ
ならぬ緒手巻を、千代の媒取かはし、肌につけ合ふわりな
き縁求女が内より以前の女歩み出て、こなたの門口、隣
りの烏帽子折様は、こなたへ來てござるかな、赦さつしや
れ」と内へ入る姿に求女は手持不沙汰、お三輪は何の氣も
付かず、おまわ、あなたが今のお人か、オ、アイノあれ、く、神子

○つなき繩子大
○三門へ橋姫の三
人なり

○岩戸隠れし神様は、たれと寝々として常闇のよるくごと
に、通ひては、又歸るさの道もせ氣もせ、それも何故戀故に、
やつるゝ所躰恥かしと、佛隠す薄衣に、包めどかをり橋姫、
思はぬ人を思ひ詫び、心の丈を口説けども、つれなき松の
下紅葉、こがれて絶えん玉の緒も、殿故ならば捨草も、暫しは
いこふ芝村の、賤の男が置き手のひで、忍びくの出逢
妻、晩にござらばナコレのんや、ほんにさ、せどの柿の木、の枝
こにて、連理をちぎる言の葉は、うれも戀中爰はまた、箸中
村よ一森の、長者が跡と名にひゞく、釜が口をも出はなれ

○つなき繩子大
○三門へ橋姫の三
人なり
○岩戸隠れし神様は、たれと寝々として常闇のよるくごと
に、通ひては、又歸るさの道もせ氣もせ、それも何故戀故に、
やつるゝ所躰恥かしと、佛隠す薄衣に、包めどかをり橋姫、
思はぬ人を思ひ詫び、心の丈を口説けども、つれなき松の
下紅葉、こがれて絶えん玉の緒も、殿故ならば捨草も、暫しは
いこふ芝村の、賤の男が置き手のひで、忍びくの出逢
妻、晩にござらばナコレのんや、ほんにさ、せどの柿の木、の枝
こにて、連理をちぎる言の葉は、うれも戀中爰はまた、箸中
村よ一森の、長者が跡と名にひゞく、釜が口をも出はなれ

と追ばつなき繩、りきむ拍子に、呑み口抜けば、酒は瀧津
瀬、びつくり敗亡、三人門へおくれじと、同じ思ひを後や先、
道をしたふて、

○道行戀のをだまき

岩戸隠れし神様は、たれと寝々として常闇のよるくごと
に、通ひては、又歸るさの道もせ氣もせ、それも何故戀故に、
やつるゝ所躰恥かしと、佛隠す薄衣に、包めどかをり橋姫、
思はぬ人を思ひ詫び、心の丈を口説けども、つれなき松の
下紅葉、こがれて絶えん玉の緒も、殿故ならば捨草も、暫しは
いこふ芝村の、賤の男が置き手のひで、忍びくの出逢
妻、晩にござらばナコレのんや、ほんにさ、せどの柿の木、の枝
こにて、連理をちぎる言の葉は、うれも戀中爰はまた、箸中
村よ一森の、長者が跡と名にひゞく、釜が口をも出はなれ

て、あゆむに、闇きくれ竹の、茂れる中を分け行けば、葉ごと
の露がほろくど、ほろく打なる雉子の聲、思ひ競べてい
ど、猶心ぼそのに立つくす、憎や案山子におどさるゝ、わ
れが姿に又おちては、つと立ち行く羽風につれて、ちりく
ちるや柳本、流るゝ水に裾濡れて、物思へとや帯解の、里羨
まじ自らは、ついに一度の情さへ、ないて身をこる涙雨、ふ
るの社の御燈の、かけか松の木の間に、ちらくくど、見
えつ隠れつ歸るさの跡を、求女がしたひ来て、互にはたど
行合の、星の光りに、顔と顔、こゝろ戀人か、何故に、爰迄跡を追
鳥は、もしやねぐらの契りをも、かなへてやるとのお心か
ど胸には、いへど詞には、おもはゆふりの袖、成る程切
なる心ざし、仇に思はじさりながら、さ程こがるゝ戀路に
て、晝をば何とうば玉の、夜計りなる通ひ路は、いとふしん

片桐家の借領に
て一帯の地を
に解けては里
に名高し打解
は解けは打解
詞なる故なり
無いさへ泣い
の身をばし雨
涙の異名なり
の降るを今の
大社布留の社
けし詞の社に
を名に求めは
を名に求めは
の空をけし七
の空をけし七
に例の空をけ
し詞の社に
枕草子にも事
なりは玉は夜
上へ玉は夜
此邊は枕詞に
三輪の神の古
樹せしなり、
住所は、姓名と
てはつがしの
けし詞、但し此
はか

なり名所を聞いたる上はこなたより二世の堅めは願ふ
事明かさせ給へど只管に問はれてげにも耻しのもりて
餘れる浮身の上、語るにつらき葛城の峯の白雲有る共、さ
だかならざる賤の女と思ふて深い疑ひの雲をはらして
自が思ひもはらして給はらば、どんな仰も背くまい、譬草
葉の露霜と消ても何の厭やせぬ、是程思ふに胴欲な解け
ぬお前のお心は、あんまり結ぶの神様を、祈過した咎めか
や、つれなの君やと恨み詫び思ひ亂る、薄かけ、夫とお三
輪は走り寄り、中を隔て、立柳立退、袂引き止め、おエ、聞
は、始め三輪の過し夜に、葉越の月の佛は、お公家様やら侍
様やら、しれぬなりふりすつきりと、水際の立つ好い男、外
の女子は禁制と、しめて固めし肌と肌、主有る人をば太膽

山城に在る也、
浮身の上へ入
は云へる也、
和宮の姿は、
忍ぶの姿、
ありの姿、
○前を白しして
産む神、高皇
たかむすの神
みかみむすの
いよめり、此
○氣の多しは
情をいよめり
○三輪の過し夜
杉を三輪に名
り、杉を三輪に
何なる書典に
○女延明しつ
子、の教和の
母、の教和の
○戀の枕詞は
強い勝を物か
云ふは、は、
へ係けたれと
名

な、断なしに惚るとは、どんな本にも有りやせまい、女庭訓
しつけがた能う見やしやんせ、エ、たしなみなされ女中様
戀は爲勝ちよ我殿御、おエ、ヤわたしが、無イヤわしがと俱に
すがりつ手を取て、圍に色よく咲く草時は、男女になぞら
へいはゞ、いはれう物か夕顔の梅は、武士櫻は公家よ、山吹
は傾城杜若は女房よ、色は似たりやあやめは妾牡丹は奥
方よ、桐は御守殿姫ゆりは、娘盛と撫子の、ナルツエく、なると
ならずと奈良坂や、兒の手柏の二人の女、腕めば腕む萩と
萩、中に揉まる、男へし、放ちはやらしとすがり付き、こな
たが引けばあなたがどよめ、戀の柵み、蔦かつら、付きまど
はれてくるく、廻るや三つの小車の花よりしらむ
横雲の、たなびき渡り有りく、と三笠の山も程近く、鳴鐘

○うづ虫めふか
七を虫に譬へて云
へるなり、うづは
蜘蛛(うづ)にてう
ち虫なるべし、

○足拂ひの代物
鎌足公の書翰を云
ふなるべし、

○知つた同志はす
道は知り安しとい
ふは、知り安しとい
ふは、知り安しとい
ふは、知り安しとい
なる方の意と聞ゆ

はぬ計りの底工憎いやつと居丈高ふかセイヤくろりや無理
じやく、入塵ヤアうづ虫め、何を知つて、こじやくやつ、ふかセイヤ
何も知らんけど、代りに成て來たおれじやによつて、一番
いふのじや、入塵オ、鎌足が代りならば、是をもかはりに心見
よと傍なる島臺追取つて、眉間へはつしと打付る、臺はみ
ちんに飛ちれど、びくとも動かすふかセア、よい加減にたゞ
けさしやれ、其厄拂ひの代物、東方さくとやらに譬へたと
いふて、業わかすのか、年にあやからんせどこそ、書ひてお
こさしやつたれ、盗人と書いちや無いぞや、うれにそちか
ら、色々な講釋を付て盗人穿鑿、知つた同志はすゞしいと
やらで、盗人の覺にが有かして、今の投打ア、こなんは正直
な人さんじやと、世間の噂、見ると聞くとで、大きなちがひ
マアうんな盗人と鎌どんを、懇にはおれがさすまいわいの、

○ういやつ此詞
浄瑠璃に何れも感
心な奴といふ所に
云へり、踏意考へ得
ず、

○萩殿此名禁中
に開えず、但萩の
戸と云へる所ある
を誤りしにや、
つねは天子の
御座なり、蝦夷子
館の段に注す、

○代物が飯くうは
賈人の事を云へる
賈屋の事を云へる
也、仍て自身を代
物といふ、

○突出す鎗床下
より不意に突出す
なり、

仁體にも似合はぬ事さんすの、よもやさうじや有まいが
の、但覺えがこんすか、イヤさうかいの「と文盲だらけも理屈
は理屈、ふかセ」どうでではる」とやり込むれば、邪智の人鹿もに
が笑ひ入塵ハテロがしこく云まげしな、うい奴出かした、其褒
美には、鎌足が實否を正すまで、儕は人質もはや籠中の鳥
同然、歸る事はならぬと思へ、ヤアく玄番彌藤次、いざ萩殿に
て天盃を廻らさん、來れやつ」と引き連れて、帳臺深く入り
にけり、ふかセア、コレく、おれを質に取らしやると、着物や道
具と違うて、代物が飯喰ふぞや、併しあの業腹では、大抵で
喰しおるまい、オ、すき腹に今の酒で、よつ程酔が來たわい、
ドリヤどこでなど一と寐入り、やつてこまうと伸上り、エ、腰
がおもい筈よ此大小、將も無い物さ、としておこして、あた
面倒なと椽板へくわたりと鳴せば、相圖かど、突出す鎗は

知月さうけしなり
うづはうづいなく
のうづはうづいなく
の好色なるをいふ
御言なり、豆さ云
よより豆焼とつ
く詞なり
見にくしといふ事
也、醜(ち)いなる
を、又ちしなる
兵衛二の口村の段
に、なつかしいを
へると同格なり、

○友呼千鳥、人
の集り来るさま

○寺友達、同塾の
友との落なり、

よんな事が出来てきた、ほんに、油断も透も成こつち
やない、大それた人の男を盗みくさつて、何じや、いこころ
しい、内祝言じや、餘りな踏付やう、よい、其かはりどこ
に居やうと尋ね出し、求女様と手を引いて、是見よかしに
いんで退るが腹いせじや」と行んとせしが、おあ、イヤ、はし
たない者じやと、ひよつと愛そを盡されたら、と云て此儘
に見捨て、是がどういなれう、エ、どうせうぞ」と心も空、登
る階長廊下、行更ふ女中見咎めて、一人が留れば二人立ち、
三入四人いつの間に、友呼千鳥むらくと、爰かここから
寄たかり、さうついに見馴ぬ女子じやが、うなはマア誰じや、
何者じや、おあ、イヤ、私は内方の、オ、うれよ、さつきのお清
殿は寺友達、奉公に出られてから、久しう逢ぬなつかしと、
ちよつと見舞に寄りまじたら、是はマアくよう来た上がれ、

○めつうな、大
層なる事世に珍ら
しき事有まじき事
なを云へる、殿内
の方言なり、

○内方、貴家とい
ふ、如き、に當る、い
音なり、

○腹いよは、癒さ
んの、癒

○茶のゆかり、伊
勢物語に、茶の一本
故に、武蔵野の草は
見乍ら、ゆかりと
ゆかりと、ゆかりと
采女の、お茶を、
なるべしと、女官
等の、ささる也、
○目引き、云々、
引かれて、目引き
と云ふ、見合はるを
云ふなり、

茶、く、呑め、さうして、たばこ、呑め、ア、お上には、あためつそ
な御祝言が有ると、聞ば、聞く程、涙がこぼれて、あたおめで
たい事じやげな、ほんに内方の様な、能い、衆の御祝言は、ど
の様な物じや、己やれ、拜んでなりと、腹いよと、うかく、爰
まで参りました、どうぞ、お前方のお心で、御様を、ちよつと
拜まして、貰ふたら、忝なうござりまする」といふ顔も、恨色
なる紫の、ゆかりの女と、早悟り、なぶつてやろと、目引き、袖
引き、女官、マア、く、うちは、仕合せな、かういふ折に、参り合ひ、お
座敷拜むといふ事は、女の身では、手柄者、したが、こちらが
呑込で、お座敷へは、出す物の、何ぞさ、ずばなるまいに、何
と皆様、いつろの事、此者に、酌取らそではあるまいか、茶、よ
かろう、く、おあ、ア、申し、其酌とやらは、茶、オ、何の又、うち達
が知つてよい物か、今爰で、教てやろ、幸ひ爰に、御酒宴の、銚

○かいらへ、
添へて居て、
役の女を云ふ、
より先きに
入奥をまわ
にて先詰め也

○乱酒 儀式
後自由に飲
事なり
○うたい物 謡曲
の流なり
○四海波静に 謡
物の曲なり

○何と千秋 爲ん
と云ふを千に
しなり

○はんなりと花
やかにと云やうの
○梅の枝 催馬樂
と云へる梅の枝の名
居る者か枝に來
々ある歌なり
○藤組 琴歌なり

八橋檢校作とハ
集めて一組とせし
故の名もまた草
と云ふといふも
を初めに載せし
を以て藤組といふ
なり
○あられも無い
在らぬ事なり
○自然 詠
詞
○竹に雀 此
古に、實に馬子
るに、實に馬子
をなりしなりん

○ほつ腹 布袋
腹にて馬を記るに
なるべし此語大
口の波由長か
行の條にもあり
同語也

○がばとこけ
はこけるおとな
りこけるは轉け
この義

子島臺有り合の、鯉君様には紅葉の局、梅の局は嫁君役、残り
りはかい添待女郎と、櫻の局が指圖として、いやがるお三輪
に長柄の銚子持たせ持ち添へ、マア盃は三つ重ね、嫁君へ
二度ついで、左へ二足、コレ立つのじや、エ、何じやいのうかく
せずと、よう覺はや、三度目ついで、鯉君へ、マ、酒がこぼれる
わいなう、不調法な、是からが亂酒、うたい物、是も嗜み無け
ればならぬ、サア四海浪など、諷やいの、サアエ、エ、どはいや
か、そんなら鯉様拜ます事はマアならぬ、サそれがいやなら
早う諷や、とせつき立てられ、是がマア、何と千秋萬歳の、千箱
の玉の血の涙、聲詰らせてないじやくり、女、オ、めでたう哀
れに出来ました、色直しにはんなりと、梅が枝でも、露組で
も、サア、聞たい所望じやく、エ、あられもない事おしや
りませ、山家育の、藪鶯ほう法華經も、片言計り、上り下りの

仇日や、馬子の歌なら、聞ても居やう、もう何事もお赦しなさ
れ、サ早ふ其鯉様に、女、サア鯉様が見たくば、早う諷や、馬子の
歌なら、面白からう、次手に振も立て仕や、否ならこつちも
成りませぬ、歸りやく」と引出され、サア、サア、サア、何の否と
申しませう、女、サそんなら、諷や、アイ、アイ、アイ、諷まするとな
く、く、も、涙にしぼる、振袖は、鞭よ手綱よ、立ちあがり、馬子、竹
に、サ雀は、ナア、品よくとまるナ、止めてサ、止まらぬナ、色の道
かいな、ア、ヨエ、爰なほつ腹め、と此様に申ますと、打ふ
せば、皆く、一度に手を打て、女、サてもきつい、嗜み事、よい慰
みで我々が、ほつ腹までよれました、馬子殿太儀、といひ
捨て、行くを驚き、コレ申し、わたしも俱に」と取すがれ
ど、ふり放されては、がばとこけ、寐ながら、裾にしがみ付き、
引ずられて、聲を上げ、なう皆様お情ない、どうぞ私も御

○置いたも、
いてさしおいての
響にて、止めよと
いふに當る、機内
に云ふ詞なり、

○三國一じや三
國は日本、此詞は古
く時禮の祝ひし詞
と見えて、無業の
書置おたり参考す
べし、出たり考す
正跡泣き倒れ
つめたり、

○亂れ心の
下つ
髪れとつけしに
なり、

一所に連れてござつて下さりませ、お慈悲く」と手を合
せ拜廻るを擲きのけ、オしつことども及ばぬ戀争ひ、お
姫様と張合ふとは、叶はぬ事じや、置いてたも、大膽女の爲
付けをせう」と耳を引くやら、協明けより、手を指入て、こそ
ぐるやら、つめりつた、いつ、突倒し、女サア、く、是で姫様の、
悋氣の名代納つた、彌目出たい御祝言、三國一じや、聲を取
り濟した、じやんく、じやんと濟だと打笑ひ、局々へ入る
跡は、前後正跡泣倒れ、暫し消え入り居たりしが、オエ、胴
欲じやわいの、く、男は取れ其上に、まだ此様に耻か、と
れ、何と堪へて居られうぞ、思へば、く、難面男憎いは此家
の女めに、見替へられたが口惜い」と、袖も袂も喰ひさきく、
亂心の亂れ髪、口に喰しめ身を震はせ、オエ、妬じや腹立
や、儕おめく、寐ささうか」と、姿心も荒々しく、かけ行向ふ

○以前の使者は
鎌足公の使者よか
七なり、

○のつけ、
叩のけ
のけを語勢に、
けといふなり、

○眼尻もさけ、
眼所裂けたり、
おと懸けたり、
○聲と音聲をこは
と聲せしなり、
を云は、聲を作る
を、こわつくる
と云ふ、俗語に聲
色を、こわ色とい

に以前の使者、オ、そなたも邪魔しに、出たのじやな、も
うかう成たら、誰が出ても構はぬ、く、そこ退きやと、袖す
り抜けて、かけ入る、裾しつかと踏へ、オエ、コリヤ、待て女、オイヤ
待たぬ、爰放しや、放しや、く」と、身をもがく、鬚搦で氷の刃、
脇腹ぐつと差通せば、うんどのつけに倒れ伏す、刀抜き捨
て、邊りを窺ひ目を配る、奥は豊に音楽の、調子も秋の哀な
る、お三輪はむつくと起返り、オエ、さては、姫が云ひ付けじやな、
エ、むでたらしい恨みは、こちから、有る物を、却てうちから
殺さする、心は鬼か、蛇かいや、い、オ、殺さば殺せ、一念の、生き
かはり死にかはり付まどふて、此恨み、晴さいで、おかうか、
思ひ知れや」と、奥の方、腕み詰めたる、眼尻も、さけぶ、聲音も
うは、枯れて、さも、いまは、しき、其有様、じろりと見やり、オエ、女
悦べ、それでこそ、天晴高家の北の方、命捨てたる、故に、より、

衣服の下へ着込む
義の名なり
○かたらひ山今
武峰と云ふ

○此大臣の靈氣
多武峰は足公の
垣地にして此山
を領し玉ふとの
格宮幣社たるに
○初恩 朝廷の御
見参やつと
付てやつと云ふに
なり、軍書にある詞
○御邪を以て云々
危き事の堪へな

○神鏡 内侍所の
御鏡をいふ

ひ致すな、最早我手に入つたるぞよ、其子細は兼てより徒
黨を集るかたらひ山、絶頂によち登れば、黒雲俄に覆ひか
り、一つの金龍我袖に落るやいなや、十握の御劔と顯は
れます、今よりは彼の山を龍岳と號くべし」と仰も高き多
武の峯、此大臣の靈嶺なり、玄上太郎すゝみ出太郎ヤア、く入鹿
汝是まで、朝恩厚く蒙りながら、王位を犯す天罰の、只今歸
すると知らざるや、見参やつ」と呼ばはつたり、眠り臥たる
兩眼をくわつと見開きうなり、聲入、事とじや、鎌足、我に
刀向はんなんど、は、雛卵を以て岩石に當らんとするよ
り、危き工、目に物見せでくれんす」と遙の樓より飛おりた
り、玄上太郎、金輪五郎、双方より引包んで切かくる、ちつと
も疼まぬ勇猛力、弓手になき捨て馬手にかなぐり、追立く
追ひ廻し、鎌足、目かけ飛びかゝる、騷がす神鏡手にさゝげ、

○降魔は 悪魔降
伏の義、和光同
塵とて、俗神道に
神の事を云ふ
○腰のつかひは
腰のあがきなり、

○重敷品 曹河の
經文なり、入鹿の
云るより、獸類に
比せし作なり、
大木が本を、遠方
の利鎌を、焼方
の利鎌を、打
ち拂ふ事、如く、
○伊勢とおみわ
は、神宮とおみわ
云ふを、おみわに
○頼の緒手巻、
り、頼の緒手巻、

入鹿が頭に指向け給へば、鏡に映る降魔の相、和光のさら
めき眼くらみ勢ひたにてたちくく、透を窺ふ勇氣の
兩人、腰の番をしつかと組む、シヤ面倒など、兩手に提げ、打付
く、膝に引敷き動かせず、鎌足後につゝと寄る、神通奇代
の焼鎌に、水もたまらずかき切たる、首は其儘虚空に上り、
火焰をくわつと吐きかけく、飛鳥の如くかけ廻る、一念
の程ぞ恐しき、淡海きつと見口、唱ふる重敷品、忽ち治る
朝敵のしげきが本を打拂ふ、鎌足の徳、劔の徳、實に譽有る
藤原氏、花の紐解く橘姫、誠を照す神鏡は、神のおかけの尊
くも、思へば伊勢とお三輪がぼだい、賤のをだ巻きくり言
をくり返したる言のはを、末に傳へし物語り、

○第五

○逆徒凶賊 入鹿
 ○部を江州志賀に
 遷せし天智天皇
 六年正月なり其
 以前は大和の岡
 宮なり
 ○大内山 山城に
 あるを熱裡の事
 云へり
 ○鎌足 玉麿
 は過りて大と
 云ふなり
 ○位を某公と云ひ
 朝臣と呼ぶが制
 度の定まりなり
 ○清涼殿 紫宸
 殿の傍あり天
 子常の御座の間
 ○裏縁 は裏美の
 物を賜はる事
 つ替代は他意
 の味なり
 ○内室は五百重
 と云ひし也
 ○武官の司 武官
 の長官の儀
 ○凱歌 勝ちどき
 を上る事
 ○故人 死たる人
 事 跡を用ふ

逆徒凶賊直に退き、年盡き新に春の空、都を江州志賀に移され、今ぞ長閑けき大内山、主上の叡慮安らかに、猶奥深き玉だれや、中央の座には中臣の内大臣鎌足卿、同じく淡海義士の面々、玄上太郎利綱一子三作諸共に、清涼殿に居並べば、鎌足の大臣は、治國の褒祿沙汰ありて、入鹿が妹橘姫、親兄にかへ忠義の貞節、豊代姫と名を改め、淡海が宿の妻と、我君の勅諭なり、また大判事清澄は、暫く敵の臣下となり、四海を治る智謀の勞詞にも述べがたし、向後武官の司とし、三作を養子となし、志賀之助清次と名乗べし、其外に太宰の後室金輪五郎をはじめとし、各々大祿給はりて、主上を初め一座の勇みかゝる所へ、金輪五郎、殘黨を搦め取り、凱歌をとなへ入り來たれば、故人となりし清船、雛鳥、兩人が追福に、妹脊の山はかはれども、かはらぬ志賀の山櫻

○花の塚 大和の
 名所 折吉川波 吉野
 川を尋言せる歟
 ○洛陽 帝都の東
 の方 文章を作
 る事 文作
 ○思得 は思みを
 受る事 思得
 ○打はばづさぬ
 時を得てはづさぬ
 の鏡
 ○さて入鹿の誅せ
 られしは歴史によ
 り、六月天皇
 二年六月天皇
 鎌足公と藤原三轉
 當りの表を讀むに
 當り、依伯の子に
 宮城の田子の二子
 を以て急に起つて
 入鹿を斬り、龍父
 夷は法を新し、龍
 りて死したるなり

供養絶えせぬ花の塚、譽を世々の香に匂ふ、折吉川波、春の風、幣帛もて拂ふ國の富、市中屋敷と所せき、月の遠近松の半ば、二月の夕あたらかに、坂東南海穀物、民は至善平かに、秋に米夏に麥、鱗までも浮かめる形、千代の並松、洛陽に文作、青き若みどり、惠得は姿満願の神は伊勢又春日に八幡、三の惠みもどこしなへ、打てばはづさぬ陣太鼓、久しき御代をぞ祝しける、

妹脊山婦女庭訓終

明治廿年六月五日印刷
同年六月十三日出版



註釈者

發行者

印刷者

大賣捌所

同

同

(妹脊山婦女庭訓)

定價金拾七錢

東京市本郷區春木町三丁目三十七番地

生田目經德

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

金港堂書籍會社

代表者東京市本郷區芝罘町六番地

金港堂書籍會社副社長

三宅米吉

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

日置九郎

大坂市東區南本町四丁目

金港堂

宮城縣仙臺市國分町五丁目

金港堂

東京市日本橋區吳服町

萬里館野口幾太郎

